

昭和19年度秋田城跡整備調査概報

秋 田 城 跡

秋田市教育委員会

序

市街地に隣接する、標高40メートルの高清水丘に位置する秋田城跡は、縁多く生活環境に恵まれた所であるため、都市化現象の波は、容赦なく史跡をも脅かすようになってきた。こうした現状に対処するため、秋田城跡発掘調査事務所を設置し、すでに3年次を迎えた。

同事務所の本年度事業は、現状変更による緊急事前発掘調査の発生等に伴い、当初計画の一部変更を余儀なくされたが、主目的の外郭線追跡調査では、予想以上の成果を得ることができたことは、まことに喜ばしい限りである。

これもひとえに、国、県、多賀城跡調査研究所を初め、各関係機関、先輩諸氏等の指導援助協力の賜ものである。また、昨秋は昭和34年（第1次）から37年（第4次）までの国営発掘調査で、総括責任調査員として活躍された斎藤忠博士を迎え、現地指導を仰いだことも併せて、深く感謝申しあげると共に、今後の指導援助を切にお願い申しあげるしだいである。

本概報は、49年度調査の結果報告であるが、史跡保護対策資料として活用されるばかりでなく、東北古代史研究の一助となれば幸いである。

昭和50年3月

秋田市教育長 佐藤博之

昭和49年度 秋田城跡発掘調査報告 正誤表

見	行	誤	正
3	下 5	完施しぬ：他4軒の	トル
4	上 12	絶対レベルは	海抜は
4	上 14	拡張していフ。	拡張していゝ。
4	上 17	須彌系土器杯	須彌系土器杯
8	上 10	例の刺突文。	列の刺突文。
9	最下		スケール単位は、市
11	上 12	絶対レベル	海抜
13	上 4	床面の堅い	床面の堅い
13	最下		スケール単位は、市
14	上 11	溝状埋構が検出しぬ	溝状埋構を検出しぬ
17	右3回	炭化物混じりの褐色	トル
19	下 4	木葉痕の残る	木葉痕の残る
19	下 1	底部破片から見出しぬ	底部破片が数点出土した
26	下 9	探査されぬ。	トル
35	下 5	6は土師器	4は土師器
42	下 11	溝状埋構上	トル

目 次

I 調査の計画	3
II 第12次発掘調査	4
1 調査経過	4
2 発見遺構と出土遺物	4
III 第13次発掘調査	8
1 調査経過	8
2 発見遺構と出土遺物	11
3 その他の出土遺物	16
IV 第14次発掘調査	22
1 調査経過	22
2 発見遺構と出土遺物	24
V 第15次発掘調査	36
1 調査経過	36
2 発見遺構と出土遺物	36
VI 考察	43
1 秋田城外郭について	43
2 住居跡について	43
3 土取り穴の年代と性格について	44



第1図 秋田城跡地形図及び調査地域図

I 調査の計画

昭和49年度の発掘調査は、昭和47年以来の主目的であった外郭線追跡調査に重点を置くとともに、現状変更申請に対して事前の発掘調査をするようにとの文化庁の指示（昭和48年11月1日付け委保第4の964号文書および、同49年4月3日付け委保第4の234号文書）に伴う緊急調査を含む実施計画を立案した。（表I）

調査費は前年度より200万円増の国庫補助対象事業の内示（総事業費800万円のうち、国庫補助50%、県費補助25%、市負担費25%）を得、さらに宮城県教育委員会の特段のご配慮と多賀城跡調査研究所のご理解によって同所の継続指導を得ながら事業を遂行することになった。

第I表 発掘調査計画表

調査次数	調査地区	調査計画面積	調査実施期間
第12次	外郭南東地区（委保第4の964号）	330m ² （約100坪）	4月1日～4月30日
第13次	外郭南西部（委保第4の234号）	330m ² （約100坪）	5月1日～5月20日
第14次	外郭西地区（焼山西土塁延長部）	826m ² （約250坪）	6月1日～7月31日
第15次	外郭北地区（幣切山西端部）	661m ² （約200坪）	8月1日～9月30日
第16次	外郭北東部（高野）	331m ² （約100坪）	10月1日～10月20日

ところが、焼山地区の第14次調査は、予想外に遺構面が深く、また多量の出土遺物のため予定調査期間を大きく延期されるに至った。そのため、第15次調査に計画された幣切山西端部の調査を取りやめる結果となり、実施状況はつぎのとおりである。

第II表 調査実施状況

調査次数	調査地区	調査実施面積	調査実施期間
第12次	外郭南東部（委保第4の964号）	450m ² （約136坪）	4月3日～4月30日（埋戻し含む）
第13次	外郭南西部（委保第4の234号）	499m ² （約151坪）	4月27日～5月31日
第14次	外郭西部（焼山西土塁延長部）	761m ² （約230坪）	6月6日～9月19日
第15次	外郭北東部（高野）	633m ² （約192坪）	10月12日～11月8日（埋戻し含む）

幸い、第13次調査は調査の結果、外郭線の南辺中央部に該当することが判明し、当初の目的である外郭線追跡と合致する調査となった。第15次調査の高野地区は、保護対策の基礎資料を得るための調査である。これまで數カ所の調査においてほとんど遺構が検出されなかつたが、今年度の調査では、8世紀末から9世紀初頭と考えられる住居跡1軒を完掘した。他4軒の住居跡プランを確認し、高野地区においても古代遺構の存在することが明確となった。

この他に、住宅新築申請に伴う文化庁の事前調査指示（昭和49年6月19日付、委保第4の490号文書）と、電々公社による寺内地区地下ケーブル埋設にともなう緊急調査があった。しかし、後世の大規模な削除、埋め立て等の整地作業がなされており、埋設溝の一部で包含層を確認したにとど

まり、遺構等の検出がなされなかつたので次數には編入しなかつた。

なお、発見遺構の性格上、瓦、土器等の出土遺物量が多く年間を通じて整理作業を行なつた。

(小松正夫)

II 第12次発掘調査

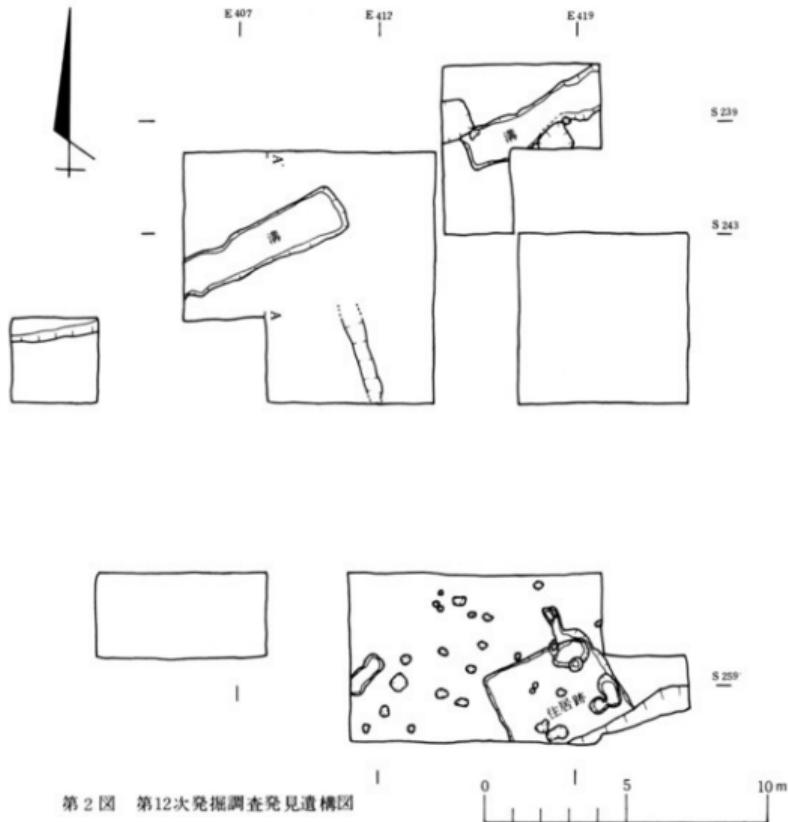
1 調査経過

第12次発掘調査は寺内字児桜を対象とした。調査は住居新築に伴なう現状変更申請による緊急調査で4月3日より4月30日まで実施した。調査面積は約450m²（約136坪）である。発掘地点は秋田城跡推定四天王寺跡の南方約100mに位置する高台で、標高は約40mである。南側は崖になつており、崖下は東側より沢が入り、現在は一帯が住宅地になつてゐる。発掘調査は推定四天王寺跡と同位の標高であり、また南方100mと近接しているため、この推定四天王寺跡に関連する遺構の有無を追求する目的で実施された。調査地は畑地となつており一部作物が作付けされている。4月3日、護国神社グラウンドより原点移動作業を行ない基本杭を設定する。調査地基本杭はX(東西線)=418.20m, Y(南北線)=-254.68mである。絶対レベルは40.17mである。4月6日に調査地全域に3×3mのグリットを設定し発掘作業に入る。主に北側と南側を窓掘りして行き遺構を確認しながら拡張していた。4月8日、表土より約30cm程度掘り下げた所でローム面に至る。以前この一帯はブドウ畠だったそうで規則的に方形の擾乱穴が確認される。9日、西北部グリットの調査で西南より北東方向へ伸びる溝状の遺構を確認する。拡張してこの遺構を追求した結果、調査地中央部にて一旦切れており、さらに北東方向に伸びていることが判明した。溝内埋土より須恵器・土器・壺の破片が出土した。12日に南側グリットで方形の住居跡を確認する。南側は壊わされているが壁、床ともしっかりとしたものである。住居跡の西側にはピット群が確認され、中には縄文時代のものもみられる。12次調査においては全般に遺物の量は少なかつた。また当初目的とした推定四天王寺跡に関連する遺構は確認されなかつた。4月23日より26日まで写真撮影、遺り方による平面実測を行ない27日より30日まで埋め戻しを行なつて調査はすべて終了した。

2 発見遺構と出土遺物

住居跡(第3図、図版3、上・中)

調査地南端にて確認されたものである。本住居跡は南側が崖のため削られ、壊わされている。東西4.30m、南北は残存部で3.73mを測る。方形を呈する。壁は非常に良好で床面までの深さは約40cmを測る。周溝は認められない。床面は平坦で固くしまったしっかりしたものである。カマドは北壁の東側に設けられた北向きのものである。袖部は西袖の一部と思われる粘土が残っている程度で、ほとんど壊わされている。煙道は巾40cm、長さ1.10mを測る。煙土が厚く堆積している。焚口部に



第2図 第12次発掘調査発見遺構図

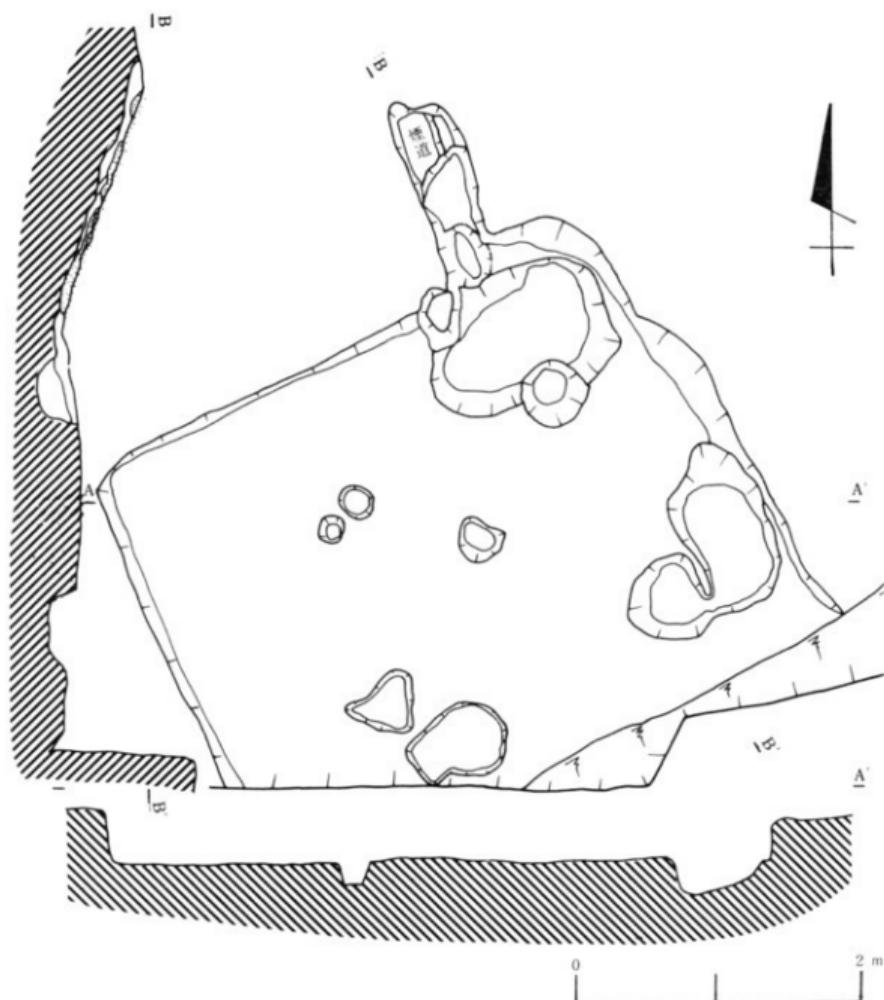
東西1.30m、南北1.10mを測る浅い皿状のピットが認められ、中には焼土が混入している。このピットは東壁際にまで伸びており、これによって袖が壊わされている。さらに深さ20cm程のピットが認められるがピット上面に粘土を貼っており、本住居跡より古いものと思われる。柱穴とされるものは認められなかった。床面に大小のピットが認められるが性格は不明である。

出土遺物（第5図1、図版15）

埋土、カマド内、東側ピット中より土師器杯、甕、須恵器杯、甕の破片が出土した。特に土師器甕の量が多いがいづれも小破片である。甕の中には頸部に沈線を回し稜を作っているものがみられる。

須恵器

杯（図版15—1）：埋め土より出土した。口径12.6cm、器高 3.6cmを測る。平底で回転ヘラ切りによって切り離されている。ヘラ切り後指ナデによってきれいに整形している。体部下方より口縁部にかけては黒色を呈しており重ね焼きの痕跡と思われる。



第3図 住居跡

溝状遺構（第2・4図、図版2下）

西南から北東方向へ伸びる溝状遺構である。確認されている部分での長さは約18.10mを測るが、西南、北東にまだ伸びるようである。調査地中央付近にて一旦4.80m程の間をおいて切れている。この溝はローム面で確認されたものであるが、断面の観察により第II層より掘り込まれていた。巾は確認面にて1.60m、底部巾1.30m、深さ40cmを測り、やや丸味をもちまっすぐに立ちあがっている。溝内の土層は2層に分られI層は黄褐色土の固くしまった層、II層は褐色土であり、固くしまった粘性大の土で微量ながらローム粒子を含む。本遺構埋土より須恵系土器杯2点、壺の破片1点が出土した。このことにより本溝は11世紀頃のものと思われる。性格は不明である。

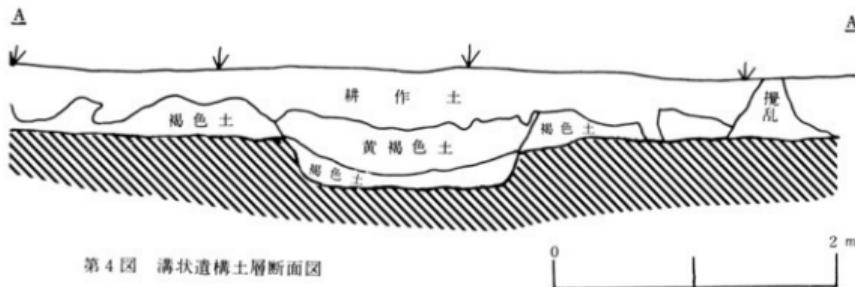
出土遺物（第5図2、3、図版15）

溝状遺構内よりほぼ完形に近い須恵系土器杯2点、壺の破片1点が出土した。

須恵系土器

杯：2（図版15-2）は口径13.8cm、器高4.1cmを測る。白橙色を呈する。3（図版15-3）は口径15cm、器高4.3cmを測り、口・底径とも2より大きく、口縁部がわずかに外反する。赤褐色を呈する。両者とも底部は回転糸切りで再調整は施していない。

第4図 土層断面図



溝状落ち込み（第2図、図版3上）

JN、JO-62グリットの西側ローム面にて確認した西南から北東方向に走る溝である。西南にどれほど伸びるかは不明である。確認されている部分で長さ1.10m、巾20cmを測る。埋土内より須恵器小形壺が出土した。

出土遺物（第5図4、図版15-4）

埋土より須恵器小形壺が1点出土した。口径4.6cm、器高9.8cmの完形品である。最大径は胴部にあり、頸部より口縁部にかけてゆるく外反している。底部切り離しは回転糸切りである。体部全

体にロクロ使用後に指ナデによる整形を施している。また頸部より上は体部と別に作っており、その接合の痕跡がみられる。

ピット群（第2図、図版3上）

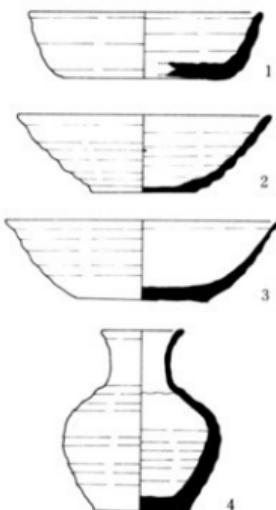
JN, JO-61・62グリットのローム面にて円形、方形を呈するピット群が確認された。埋土、出土遺物より縄文時代のピットも認められる。

出土遺物（第5図5、図版3下右）

波状に2条の沈線を施し、その間に右側には1例の刺突文、左側は2列の刺突文を施している。中央には沈線による渦巻文がみられる。地文は単節斜縄文である。縄文時代中期末葉の土器と思われる。

（石郷岡誠一）

第5図 第12次発掘調査出土遺物



III 第13次発掘調査

1 調査経過

第13次発掘調査は秋田市寺内字大小路地区を対象に、住居新築に伴なう現状変更申請による事前調査として行なわれた。

同地区は昭和33年～37年の国営調査の際、瓦、須恵器を伴なう住居跡が発見されており、調査対象地点においても瓦、土器片の散布がみとめられていた。

調査地点は護国神社より南西約400m、海拔32～35mの南緩斜面の畠地である。畠地は四段に分かれ、各々1m程の高低差があり、北西に高くなっている。

調査は同地点における遺構の有無を確認する目的で4月27日から5月31日まで行なわれ調査面積は499m²（約151坪）である。

調査の結果、東側の低い畠地は大部分が飛砂層まで耕作による擾乱をうけており、遺構はほとんど西側の高い畠地で確認された。

検出した遺構は住居跡2棟、溝状遺構、掘立柱列、粘土積土遺構、近世以降の溝2、落ち込みで

ある。

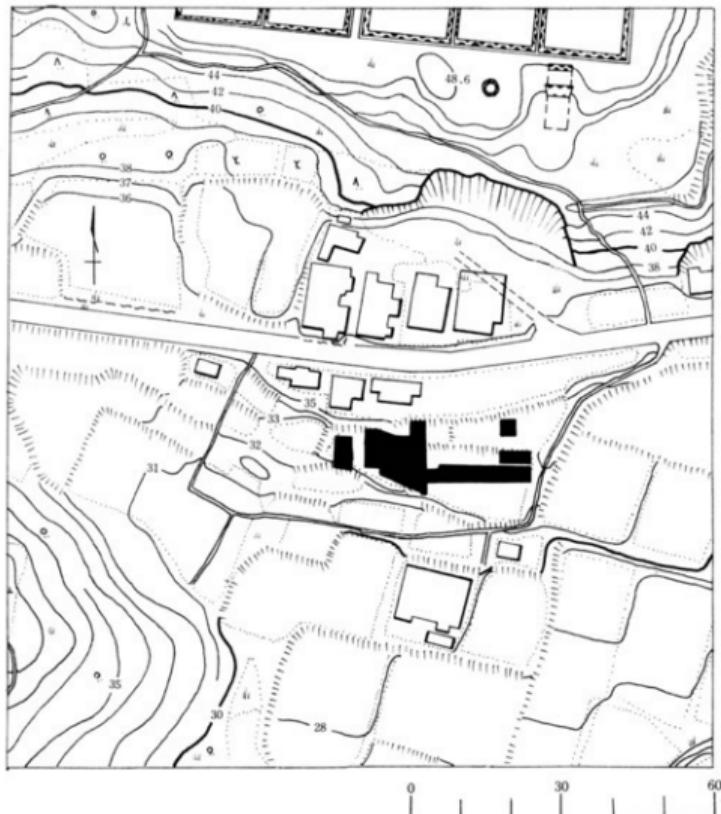
調査はまず発掘地点に基準点を設定し（4月31日）、発掘器材の運搬を行なった（5月1日）。

次いで基準点より 3×3 m グリッドを基本とした発掘区を設定し、南東の低い畑地から調査を開始した。

調査の結果、ほとんどが耕作によって飛砂層まで擾乱をうけており、巾 2.2m、厚さ10~40cmの北西から東南に伸びる堅い黒褐色土帯と、グリッド東端で飛砂層が急激に落ち込んでいるのが確認された。黒褐色土帯から須恵系土器破片が、飛砂層から縄文式土器2個体が出土した（5月7日）。

同日から、調査を西の高い畑地で行ない、東向きの粘土組みのカマドを有する1号住居跡を検出した。

第6図 第13次調査周辺地形図

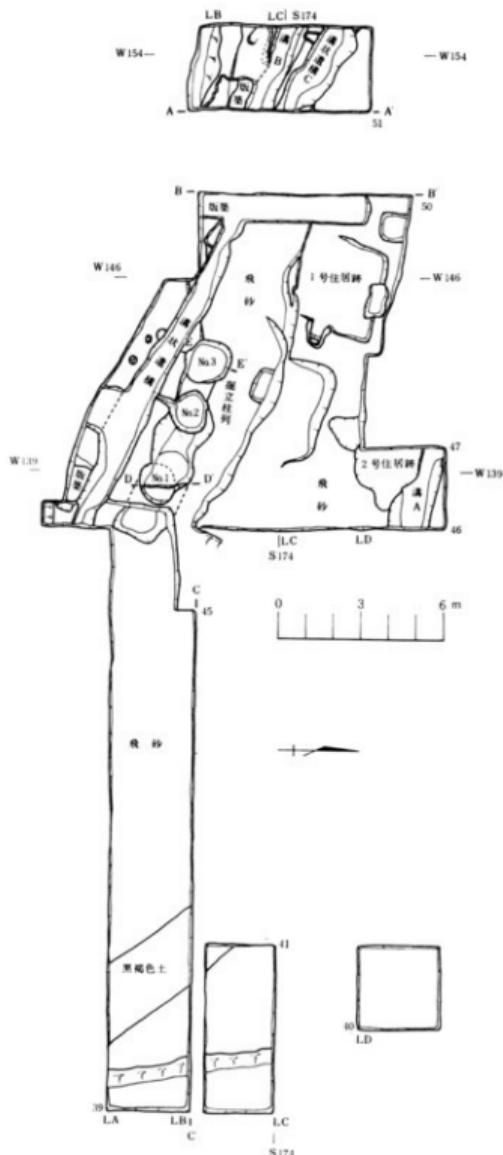


耕作土下は耕作土と同質の褐色砂質土であり、飛砂層の傾斜に沿って南側に厚く堆積している。多量の遺物を包含しているが、層内に均一にみとめられ、近世以降の遺物も含まれておらず、畑地造成の際の整地層と考えられた。遺物は瓦片が圧倒的に多く、特に格子目瓦の出土量が比較的多かった。同層を除去すると南側では赤褐色砂質土、赤褐色粘土層、北側で炭化物混りの褐色砂層となり、層序を把握するため、土層観察用のトレンチを設定した（5月13日）。

土層観察の結果、飛砂層上に赤褐色粘土を版築した埴土造構があり、赤褐色砂質土を埋土とする溝状造構が、粘土埴土造構と炭化物混りの褐色砂、黒色砂層を掘り込んでいること。又、両造構とも近世以降の溝によって切られていることが判明した。

東西に伸びる溝状造構、埴土造構を追求し、プランを確認した。又、炭化物混りの褐色砂、黒色砂面での遺構の検出がないため、遺物に注意して同層を除去した（5月17日）。溝状造構の埋土からは瓦、須恵器系土器破片が出土するが、粘土埴土造構には遺物は含まれていない。

第10次調査の際、検出した某



第7図 第13次調査発見遺構図

地、溝状遺構と同様の遺構と考えられた。

5月18日、近世以降の落ち込みが確認され、埋土を除在した結果、更に下層に飛砂層を掘り込んだ掘り方を検出した。

掘り方は東西に並ぶ、三本の掘立柱列であり、赤褐色砂の埋土上を粘土積土遺構の構築面である砂層が覆っており、粘土積土遺構より古いことが確認され、東からNo.1～No.3と仮称した。埋土内から、土師器、繩文式土器破片が出土した（5月21日）。

同日、2号住居跡を検出、カマドは既に耕作によって削平されていたが、東向きであり、堅い床面を有することが判明した。

5月25日、平面実測のため、やり方を設定した。この段階で、最初のグリッド設定に1mの誤差があり、グリッド全体が東に1mづつずれていることが判明した。グリッド毎に遺物を収容しており、最初のグリッド名をそのまま使用することとした。

5月29日、寺内農協横のベンチマークから調査地基準点の絶対レベル(33.84m)を測定し、31日、写真撮影、断面、平面実測を行ない、すべての調査を終了した。

2 発見遺構と出土遺物

住居跡

第1号住居跡（第8図、図版4の上）

東西3.2m、南北2.9mの隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。東壁、西壁、北壁が確認されているが、耕作による削平のため壁の立ち上りは10～20cm程度である。南壁は完全に削平され確認しえなかつた。

カマドは東壁、飛砂層上に直接、黄褐色粘土で構築され、焚口巾60cm、奥行90cmであり、煙道は確認されなかつた。燃焼部から前庭部にかけて厚さ5～10cmで、炭化物、焼土が堆積しており、土師器甕破片が出土した。

周溝、柱穴は検出しなかつた。

出土遺物（第9図、図版15）

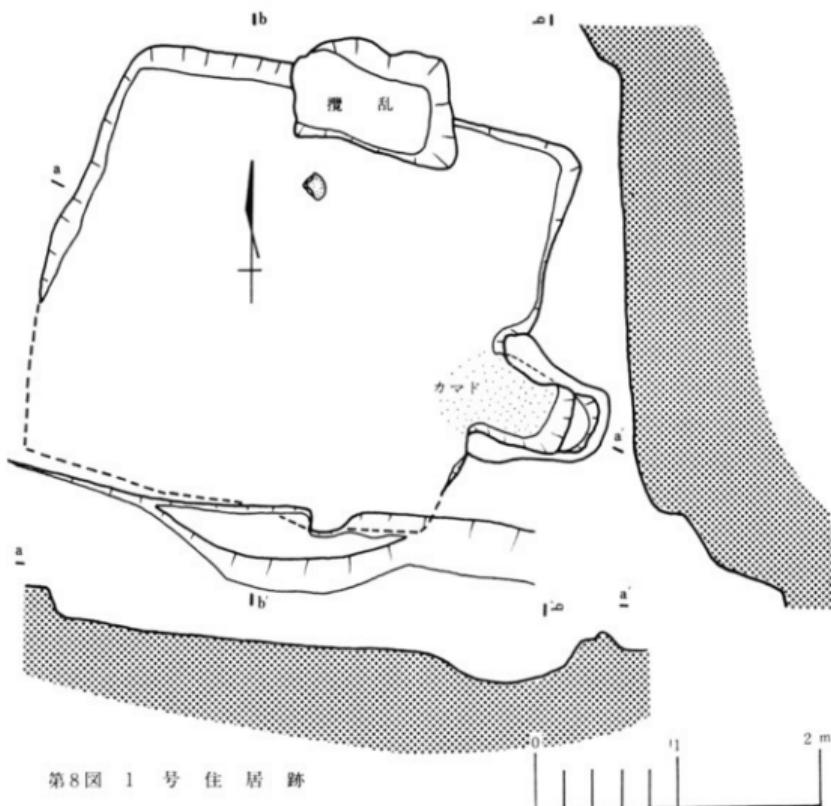
埋土出土

土師器は甕破片だけで、「く」字状に外反する口縁部、ヘラケズリのある底部、内外面カキ目のある胴部破片である。

須恵器は、回転ヘラケズリのある杯、外面葉脈状タタキ板痕、内面同心円状アテ板痕のある甕破片が出土した。

カマド及び床面出土

土師器、杯：カマド内より、内外面ヘラミガキで、黒色処理の施された体部小片と、外面下半に、

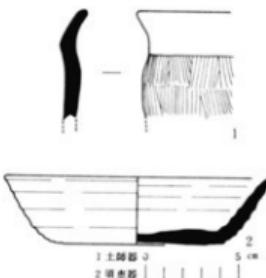


第8図 1号住居跡

こまかく縦横にカキ目を施し、内面及び外面上半にヘラミガキを施した非内黒の丸底杯破片が出土した。

甕「く」字状に外反する口縁を有する1号カマド内より出土した。口縁部はナデが行なわれ、胸部は内外面ともにカキ目が施されている。部分的に煤状の炭化物が付着している。

須恵器 2(図版15の5)の杯が床面に接して出土した。静止系切りであり、手持ちヘラケズリで調整している。他にカマド内から、静止系切り、回転ヘラケズリ調整のある杯底部破片が出土した。



第9図 1号住居跡出土遺物

第2号住居跡(第10図、図版4の下)

南北 2.3m、西半分は発掘区外にあり全体のプランは不明であるが、隅丸方形の小規模な竪穴住居跡と考えられる。壁は比較的良好な北壁で10cm程の立ち上りで、赤褐色砂層より掘り込まれている。南壁は削平され明瞭でなく、床面の堅い炭化物混りの砂の範囲で押えられる程度である。

カマドは東壁に付設されているが、削平され、わずかに基底部の焼土と粘土ブロックの範囲が確認された。

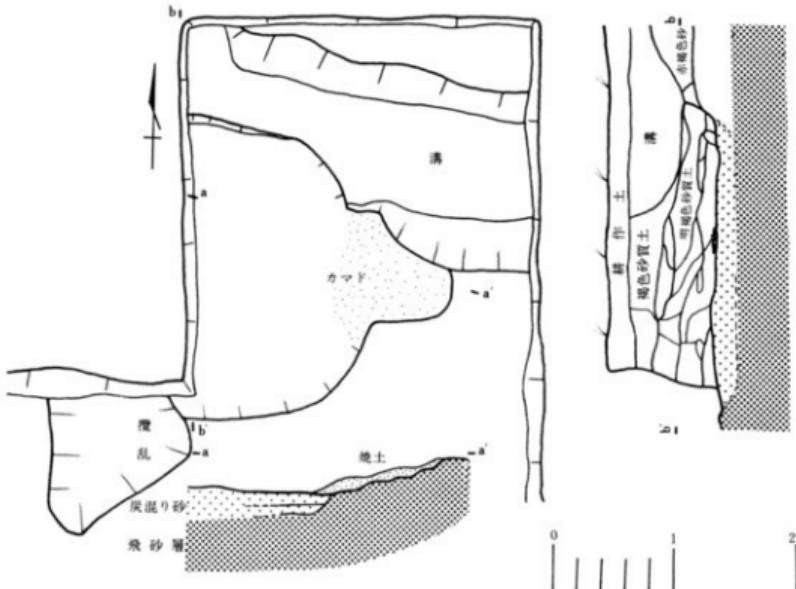
出土遺物(第11図、図版15)

埋土出土

内面黒色処理、ヘラミガキのある土師器杯小片、カキ目のある土師器甕破片、須恵器杯、甕破片が出土した。

1(図版15の6)は回転ヘラ切り、再調整のない須恵器杯で、口縁部に黒色の帯状の重ね焼き痕がみとめられる。

2は墨書のある回転ヘラ切り、回転ヘラケズリ調整の須恵器杯底部である。墨書は判読できなかつた。

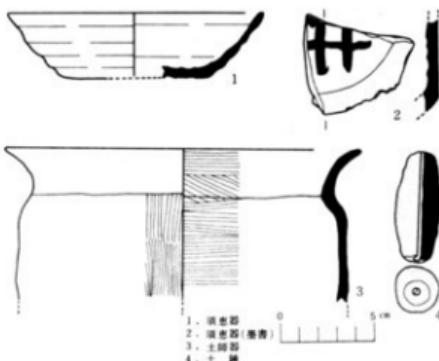


第10図 2号住居跡

カマド及び床面出土

3はカマド内出土の土師器蓋である。内外面にカキ目を施し、「く」字状に外反する口縁部には内外面ナデを行っている。床面からも同様な土師器蓋が出土した。

4(図版15の7)はカマド内出土の小型の土鍤である。直径2.4cmで、孔は棒状のものを抜き取った痕跡が残り、直径0.3cmである。



第11図 2号住居跡出土遺物

東西に伸びる三本の溝状遺構が検出した。二本は埋土が耕作土、畑地造成時の整地層であり、埋土内から近世以降の磁器片等が出土している。畑地耕作に伴なう掘り込みと考えられる。ただ、埋土内より特徴的な遺物が出土しており、便宜上、溝状遺構a, b, cと仮称する。

溝状遺構a(第10図、図版14の下)

2号住居跡上層で確認された近世以降の溝である。部分的に2号住居跡カマドを掘り込んでいる。

出土遺物(第12、15図、図版15)

土師器、須恵器、須恵系土器、瓦、繩文式土器破片と共に近世以降の磁器片が出土した。

3(図版15の8)は宝珠状のツマミを有する須恵器蓋であり、回転ヘラ切り後、ツマミを中心に行なっている。4(図版15の9)も宝珠状のツマミを有する須恵器蓋であり、回転ヘラ切り後、天井部を回転ヘラケズリしている。

第15図の17(図版16の22)はL Rの斜繩文であり、繩文晩期の粗製土器と考えられる。

溝状遺構b(第7図、第13図)

畑地造成時の整地層(褐色砂質土)を埋土として、溝状遺構Cと粘土積土遺構を掘り込んでいる近世以降の溝である。

出土遺物(第12図、図版15)

溝状遺構aの出土遺物とはほぼ同じであるが、砥石、土鍤の出土がある。

1は内面黒色処理を施した土師器台付杯である。丸底の杯部であり、高台は摩滅している。2はツマミの欠損した須恵器蓋である。天井部はナデが行なわれ、ロクロ切り離しは不明である。口縁部は全体に丸味を有し、外面に一条の凹帯が回る。内面全体が摩滅しており、墨の付着がみとめら

れ、硯に転用している。5(図版15の10)は直径3.8cm、孔の直径2.1cmの土錐である。孔に棒状のものを抜きとった痕跡が残る。6(図版15の11)は孔部分の欠損したさげ砥石である。4面に使用痕がみとめられる。

溝状遺構c(第7、13図、図版4の上)

東西(約E25°S)に伸びる巾1.5mのU字状の溝状遺構である。赤褐色砂質土の埋土であり、粘土積土遺構を切って、掘り方は飛砂層まで達している。柱の有無、溝の性格については不明であるが、第10次調査の際、確認された築地に沿って伸びる溝状遺構と埋土の状態、出土遺物、粘土積土遺構(築地)を切っている点で類似しており、同様の遺構と考えられる。

出土遺物

須恵器、土師器、須恵系土器、瓦のいずれも小片が出土した。

須恵器 杯 底部回転糸切り再調整なし1点、回転ヘラ切り再調整なし1点、ナデを行っているものの3点、回転ヘラケズリ調整3点、切り離しは不明であるが手持ちヘラケズリのあるもの1点が出土している。

台付杯 1点は静止糸切り、1点は回転ヘラ切り、回転ヘラケズリ調整である。他に、切り離し不明であるが回転ヘラケズリ調整のあるものが1点出土している。いずれも台は0.3~0.5cmの張り付け高台である。

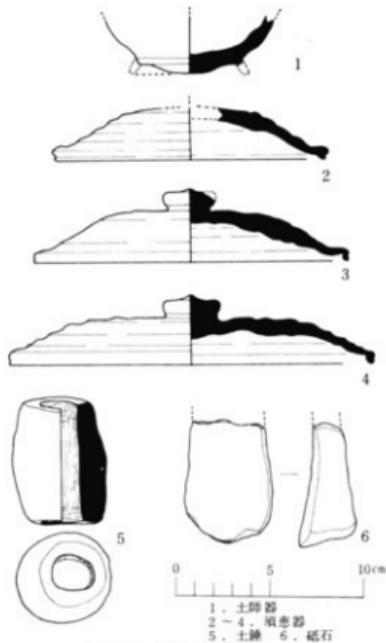
甕 胸部破片が出土している。外面に葉脈状タキ板痕、内面同心円状アテ板痕のものと、外面の葉脈状タキ板痕のみのもの、内外面ともロクロ痕のみとめられるものがある。

土師器 杯 3点の破片が出土している。2点は内面黒色処理、内外面ヘラミガキを施している。他の1点は回転糸切り後、体部下端に回転ヘラケズリを施している。

甕 内外面カキ目のある長胴甕の破片、「く」字状に外反する口縁部破片、頸部に段を有するものが出土している。

須恵系土器 底部破片が5点出土した。回転糸切り、再調整がなく、底径の小さいものである。

他に丸瓦、平瓦の小片が出土しているが、格子目瓦の出土はまったくない。



第12図 溝状遺構a・b出土遺物

掘立柱列(第7、13図、図版4の上、5の下右)

溝状遺構Cに平行する3本の掘立柱列である。直径約1.2m、深さ約1.8mであり飛砂層を掘り込んでいる。各掘り方の間尺は2m(約6尺)である。埋土は赤褐色粘土をわずかに混入する赤褐色砂であるが、柱のあたりは確認できなかった。東よりNo.1、No.2、No.3と仮称したが、No.1では上層の近世以降の落ち込みと重複している。No.2、No.3の観察から、埋土上層を粘土積土遺構の構築面である砂層と、積土遺構の崩壊土が覆っており、粘土積土遺構より古いことが確認された。

出土遺物(第15図、図版16)

埋土より須恵器、土師器、繩文式土器が出土している。

須恵器は回転ヘラ切りのある杯底部小片、葉脈状タタキ板痕、同心円状アテ板痕を有する甕破片であり、No.3よりの出土である。

土師器は内面黒色処理の施された杯小片、カキ目のある甕小片であり、No.3よりの出土である。

繩文式土器

1(図版16の6)はNo.1出土の結節回転、付加繩文のみとめられるもので、繩文前期と考えられる。4(図版16の9)はNo.3出土である。LRの斜繩文であり、無文部は研磨され光沢を帯びている。繩文後期と考えられる。10(図版16の15)もNo.3出土である。貼り瘤のある深鉢型土器の口縁部である。瘤には二種類みとめられ、小突起状のものと、比較的大きく縦に刻目に入るものである。小突起間には沈線による斜格子状文が施され、突起部は沈線により区画され、縦位に間隔の狭いヘラ状工具による刻目が入る。口縁部の突起部は欠損している。繩文後期後半新地式と考えられる。16(図版16の21)はNo.2の出土でLRの細かい繩文である。

粘土積土遺構(築地状遺構)(第7、13図、図版5の上、下左)

溝状遺構Cにはほぼ平行して、東西に伸びる土手状の遺構である。溝状遺構b、cによって切られ、又、耕作による搅乱のため、遺存状態は悪く、部分的に確認されるだけであるが、遺存状態の良好なLB-51グリッドでは40cmの厚さで版築された粘土積土が残る。飛砂層、或いは粘土混りの砂層上に直接、粘土を版築しているのが判明したが、基底巾、高さは不明である。

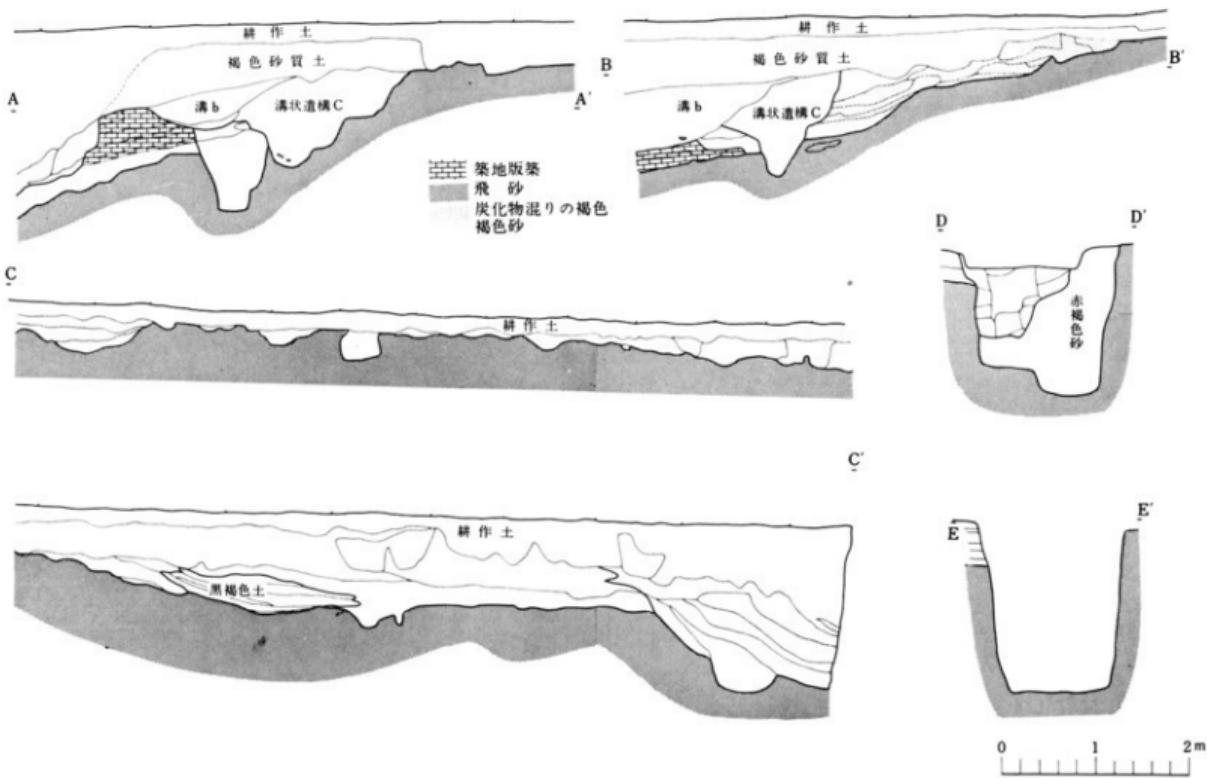
第10次調査の際の築地積土に類似しており、溝状遺構との関係も同様であることから、調査地点から、更に東に伸び、築地の南辺を形成する遺構と考えられる。

積土は無遺物層であるが、崩壊土内からはカキ目のある土師甕小片が出土した。

3 その他の出土遺物

各層出土遺物

1 表土層出土(第15図、図版16)



第13回 第13次調査土層断面図

同一個体と考えられる縄文晚期の小型壺型土器片が出土した（第15図12、13、図版17の17、18）。黒色で光沢にとみ、研磨されている。外面には朱が付着しており、特に内面は厚く付着している。口縁は平縁をなし、外反する口頸部には羊歯状文が回る。

2 棕褐色砂質土層出土（第14、15図、図版15、16）

多量の瓦、須恵器、土師器、須恵系土器、砥石、縄文式土器、近世以降の磁器が出土した。第14図の17～19（図版16の3～5）は格子目の平瓦であるが、格子目瓦の出土が本層では比較的多い。17、18（図版16の3、5）は「秋」の刻印がみとめられる。4（図版15の21）の砥石は凝灰岩製であり、両端の欠損したものである。

縄文式土器（第15図、図版16）

2（図版16の7）は絡状回転の撚糸文のみとめられるものである。5（図版16の10）は頸部から口縁部にかけてLRの縄文を施し、頸部以下無文であり研磨され光沢を帯びる。縄文後期の壺型土器と考えられる。8（図版16の13）は無文の口縁部であり、研磨されている。18（図版16の23）は細かいLRの斜縄文が施されている。

3 明褐色砂質土層出土（第14、15図、図版16、16）

LD-46グリッドのみにみとめられた層である（第10図）。同グリッド南側では検出しなかった。須恵器、土師器、縄文式土器が出土した。

須恵器 杯 3点が出土した。すべて回転ヘラ切りである。第14図の4（図版15の13）は丸底風の底部であり、切り離し後の再調整はない。半焼成であり、赤褐色を呈する。5（図版15の14）は切り離し後、ていねいにナテを行なっている。内外面ともに火だすきがあり、口縁部には帯状の重ね焼き痕がみとめられる。

他に、葉脈状タタキ板痕、同心円状アテ板痕の甕胴部破片、長頸壺の頸部破片が出土した。

土師器 回転糸切りで体部下端に回転ヘラケズリを施した非内黒の杯底部破片、内面黒色処理で回転糸切り、台の取りつけ部に刺突を施した台付浅鉢型土器、カキ目のある長胴甕破片、ロクロ痕のみとめられる甕破片が出土した。

第15図の11（図版16の16）は羊歯状文の施された晩期縄文式土器である。

4 赤褐色砂層出土（第14図、図版15）

2号住居跡によって掘り込まれている土層である（第10図）。南側では明瞭でない。

土師器、須恵器、鉄鎌が出土した。

土師器はカキ目のある長胴甕小片である。6（図版15の15）は回転糸切り、回転ヘラケズリ調整のある須恵器杯である。赤褐色を呈し、半焼成である。16（図版16の2）の鉄鎌は先端が欠損して

いる。基部には木製の柄が銹着しており、裏面にもみとめられるといころから、柄は基部を狭む状態で装着されたものと考えられる。巾は基部で4cm、欠損している先端付近で3cm、厚さは0.3cmである。

5 棕色砂層出土（第14、15図、図版15、16）

須恵器、土師器、砥石、瓦、繩文式土器が出土した。

3は体部下半から底部全体を粗い手持ちのヘラケズリを行なっている須恵器杯である。体部は左から右、底部は不定方向のヘラケズリで、内面は斜方向にナデを行なって、ロクロ痕を消している。8（図版15の17）はやや扁平な宝珠状のツマミを有する須恵器蓋で、天井部はゆるやかに丸味を帯びており、口縁部はわずかに屈曲する。ナデが行なわれており、切り離し痕は明瞭でないが、回転ヘラ切りと考えられる。9（図版15の18）は須恵器長頸壺の底部破片で、外面にロクロ痕がみとめられる。10（図版15の19）は浅鉢型の土師器である。全体に摩滅しているが、内面にわずかに横のカキ目がうかがえる。輪積み（巻き上げ）の際の粘土ヒモの凹凸がみとめられ、底部は丸底風を呈する。13（図版15の22）は凝灰岩製のさげ砥石で、孔は途中までうがってあるが貫通していない。

繩文式土器（第15図、図版16）

後期から晩期にかけての遺物である。

6（図版16の11）は弧を描く沈線によって区画され、無文部は研磨されている。7（図版16の12）は繩文地に接した無文の部分を一段低く削り取って、繩文面が浮き出すようにしている。9（図版16の14）はLRの斜繩文を横位の沈線で区画し、磨消しを行なっている。14（図版16の19）は壺型土器の肩部で、LRの斜繩文である。15（図版16の20）もLRの斜繩文である。

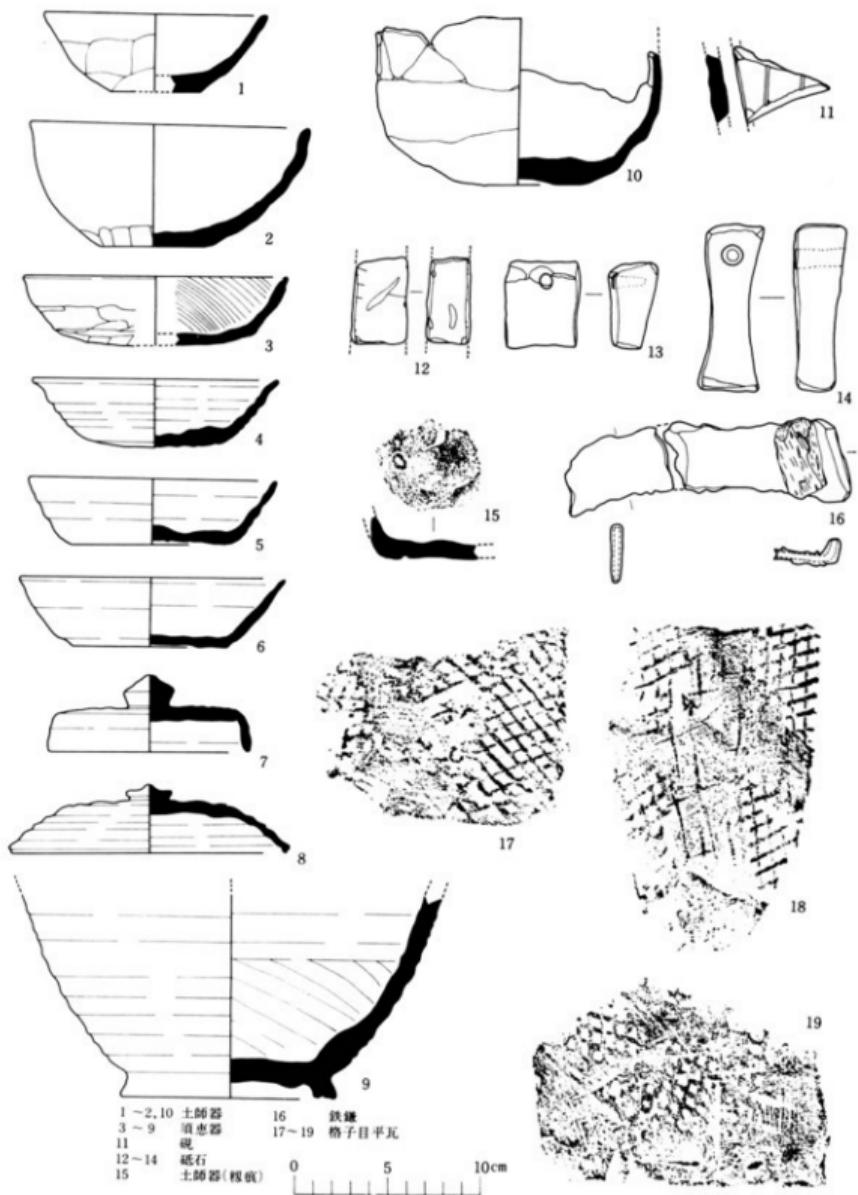
6 黒色砂層出土（第14、15図、図版15、16）

土師器、須恵器、砥石、瓦、繩文式土器が出土した。

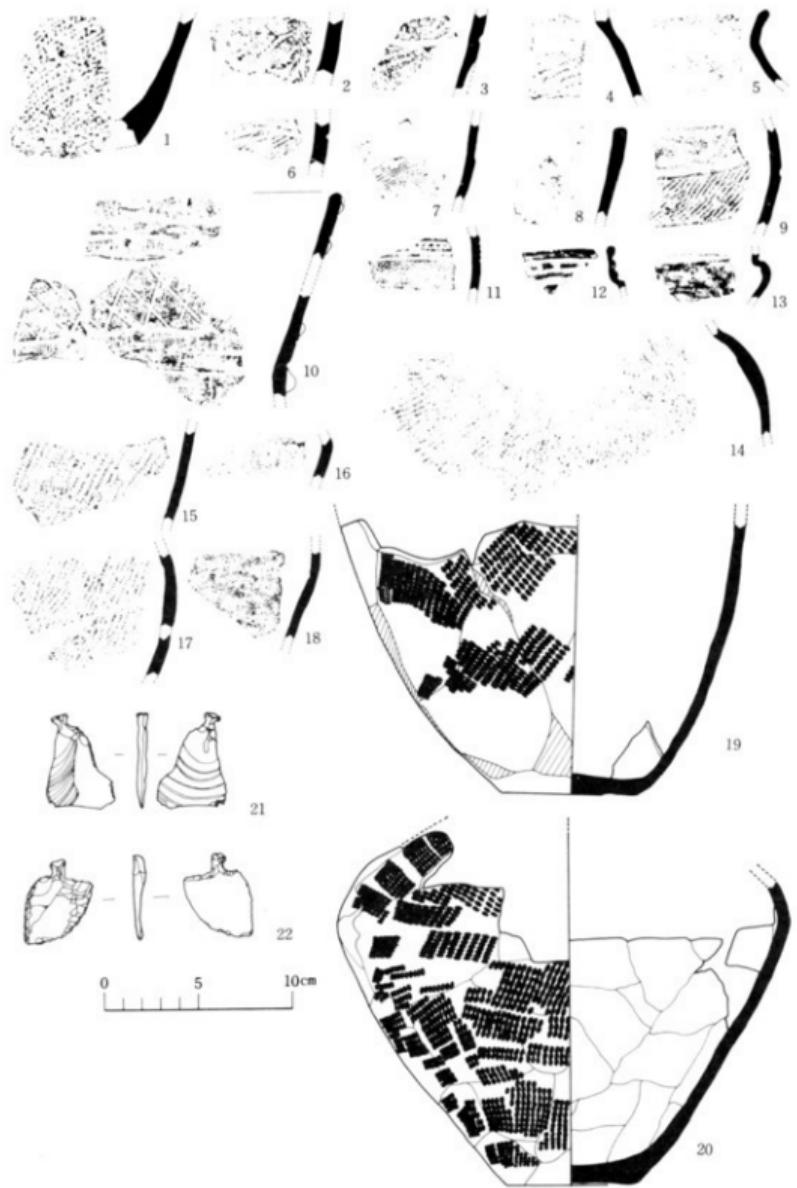
土師器 杯 1は内面黒色処理であり、外面上半から底部にかけて左から右にヘラケズリを行なった後、全体に横にヘラミガキを施している。体部には輪積み（巻き上げ）の際の粘土ヒモの凹凸がみとめられ、平底を呈する。2（図版15の12）も内面黒色処理であり、右から左にヘラケズリを行なった後、全体にヘラミガキを施している。輪積み（巻き上げ）の際の凹凸がみとめられ、全体にゆがみがある。底部は丸底風を呈する。他に小片であるが、丸底を呈する、外面下半から底部にかけてカキ目が施されたものが出土した。上半、内面はヘラミガキが行なわれ、非内黒である。

甕 15（図版16の1）はヘラケズリのある底部破片で、稜痕が明瞭に残る。他に本葉痕の残るヘラケズリのある底部破片、カキ目のある長胴甕破片、木葉痕のある内面黒色処理の施された鉢型土器の底部破片が出土した。

須恵器 杯 底部破片から点出した。いずれも回転ヘラ切りで、回転ヘラケズリ調整がある。



第14図 各層出土遺物



第15図 第13次調査出土石器時代遺物

蓋 7 (図版15の16) は宝珠状のツマミを有するもので、平坦な天井部からほぼ直角に口縁に至るものである。回転ヘラ切りで、ナデを行なっている。他に回転ヘラケズリ調整のあるものが出土している。

14 (図版15の23) は凝灰岩製の砥石で孔は両側からうがたれている。6面はすべて使用され、摩滅している。

第15図の3 (図版16の8) はLRの斜繩文であり、巾の太い横位の沈線が施されている。

7 飛砂層出土 (図15、図版17)

飛砂層からの出土遺物はすべて石器時代の遺物である。

19 (図版17の1) はLRの斜繩文のみであり、体部下半はヘラ状工具でなでつけ、胎土を押さえている。光沢のある黄褐色を呈する。繩文晩期の壺型土器と考えられる。20 (図版17の2) もLRの斜繩文のみで、肩部は横、体部下半は縦に原体を回転させており、底部周縁はヘラ状工具でナデつけている。全体に光沢のある黄褐色を呈し、晩期壺型土器と考えられる。19と20は重なり合う状態で出土した。

21 (図版17の3)、22 (図版17の4) は縦型の石匙である。両者とも打撃面を把手として使用しており、主要剥離面を残しているが、21は片側にのみ調整剥離がみとめられ、22は周縁を丹念に調整剥離している。21は頁岩製、22は流紋岩製である。

他に掘立柱列上層の近世以降の落ち込みより、第14図の11 (図版15の20) の円面硯の脚部が出土した。縦にヘラ描きによる2cm間隔の刻線が施され、方形の窓を有する。

(日野久)

IV 第14次発掘調査

1 調査経過

第14次調査は寺内字焼山を対象とした。

調査地は、高清水丘陵の西側で眼下には、旧雄物川と日本海を望むことができ標高43~45mの高台に位置する。現在は市水道局用地となっている。未使用地であるため、雑草とアカシヤの林と化している。調査地は、第2図に示した如く、昭和35年に北方の一部が、調査され、土壘が確認されているため、その延長線確認と性格把握の調査である。

調査は6月6日から9月19日まで実施された。発掘面積は761m² (約230坪) である。

6月6日に、護国神社グラウンドより原点移動作業と調査地草刈を実施した。調査地基本杭は、X (東西線) = -276.88m, Y (南北線) = -39.89m, 海抜標高 (寺内農協横ベンチマークより)

は、42,996mである。10日、3m方眼を設定し、NE、NH-91-94グリッドの表土除去作業を行なう。中央部に径4~5mの大規模な土取り穴があり、掘り下げた結果、赤褐色粘土と黒褐色粘土の互層を呈する築地積土を確認した。13日からNH-NJ-91-94グリッドの表土除去作業開始。NE~NHグリッド同様、大規模な土取り穴を確認、掘り下げる。赤褐色粘土の築地積土と考えられる層を確認した。27日、NH~NJ-91の築地崩壊土除去作業、薄い焼土層を確認した。しかし、この焼土層は、下層に瓦層のあることより築地崩壊後の焼土面と思われる。また7日、6日まで崩壊土除去作業を行なった結果、NH-94、NG-91、92付近においても少量の焼土とともに巾40cm、長さ2m程の炭化材が5~6本検出された。そのうちの1つは厚さ1.4cmの板状をなす。これらの炭化材は、前者の焼土層と同一レベルである(図版9)。6日には、築地上面と炭化材の写真撮影を行なう。さらに焼土面を掘り下げ瓦層を検出し、15日には瓦堆積状況の写真撮影。16日、NE南方高台調査のため草刈および伐採作業。表土除去した段階で、築地と、かって上水道タンクに引水した当時の水道管埋設溝が検出された。水道管理設溝は、掘り下げた結果築地本体を斜に切断しており、掘り方断面に、黒褐色と赤褐色の築地積土の版築の様相を明確に確認することができた。また築地東側に隣接して巾2mの溝状プランを確認した。この溝状遺構は、昨年度第10次調査で検出した溝状遺構と同様である。

20日には、築地、溝状遺構追求のため、南方突端のMOラインまで拡張した。南端部は後世の擾乱が著しく、溝状遺構と築地積土の一部しか確認できなかった。また、24日には、西南に面する2間(4.4m)×1間(4m)の掘立柱建物跡が検出された。この遺構も昨年度第10次調査で検出された掘立柱建物跡と同様の遺構である。

26日には、掘り残してあった、調査地の中間部NE~NBグリッドの作業を実施した。崩壊土中の瓦堆積はごく少量であるが、北に下がる傾斜のため沢筋に流れ込んだためと考えられる。ND~NFには多量の瓦が堆積していた。8月6日、瓦を取りあげ、崩壊土除去作業。瓦層の下層は、薄い焼土面が崩壊土と互層をなし、数層の焼土層にみられるが、本来は、同層であろう。少量の焼瓦とともに土器が多量に出土した。

27日、築地精査を行なう。寄柱等の検出作業を行なった結果、NF~NBにおいて顕著にみられるが、左右対称と考えられるピットは確認されなかった。ピットは、深いもので、60cm程すべて飛砂層まで掘り込まれていた。

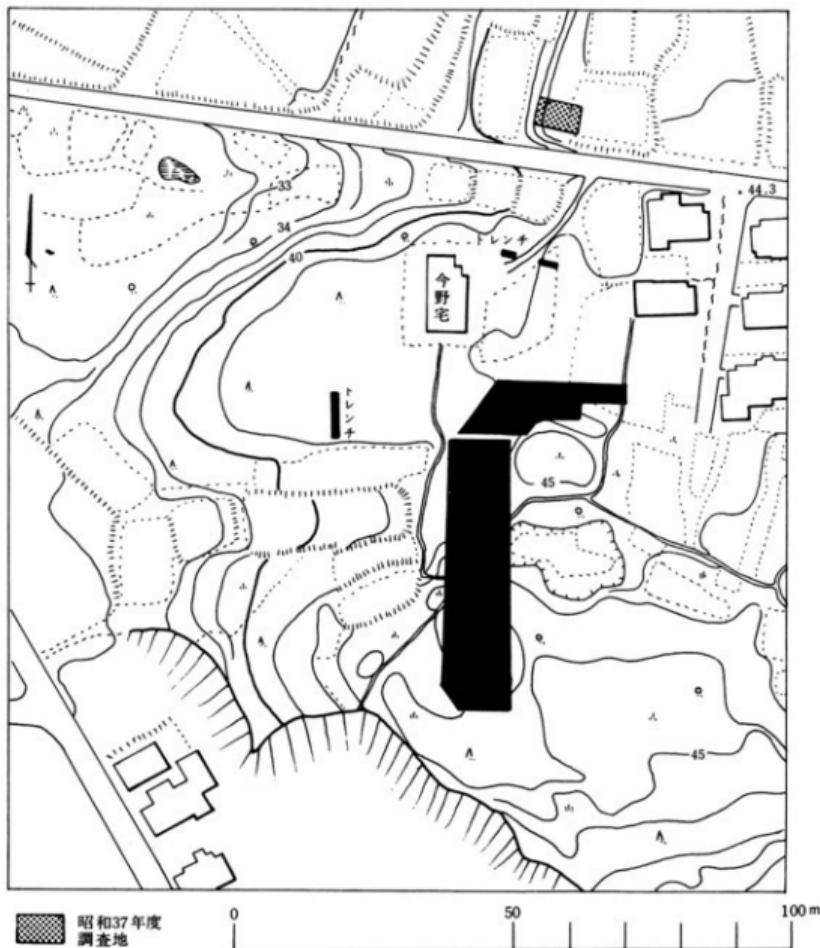
9月3日、やり方を設定し18日まで、平面、レベル実測を実施した。土取り穴群はやり方を用いず平板測量を実施した。また実測の期間中、NK~NM-85~94までの土取り穴を掘り下げる。特にNK、NL-89~91の炭層からは、多量の一括土器と少量の瓦が出土した。4日、5日には補足調査として、築地延長線上にあたる今野宅前庭と西方に突出した今野宅裏山に1m巾のトレンチを3本入れた。その結果、古代の遺構、遺物は全く確認されず、新しい土取り穴が検出されたに過ぎない。しかし今野宅前庭トレンチでは築地崩壊土が確認された。17日には全景写真を撮り、9月19日には

全ての調査を終了した。なお、9月15日には一般市民を対称に現地説明会を行なった。

註1 「昭和47年度秋田城跡発掘調査概報」 秋田市教育委員会 昭和48年 P-5・6。

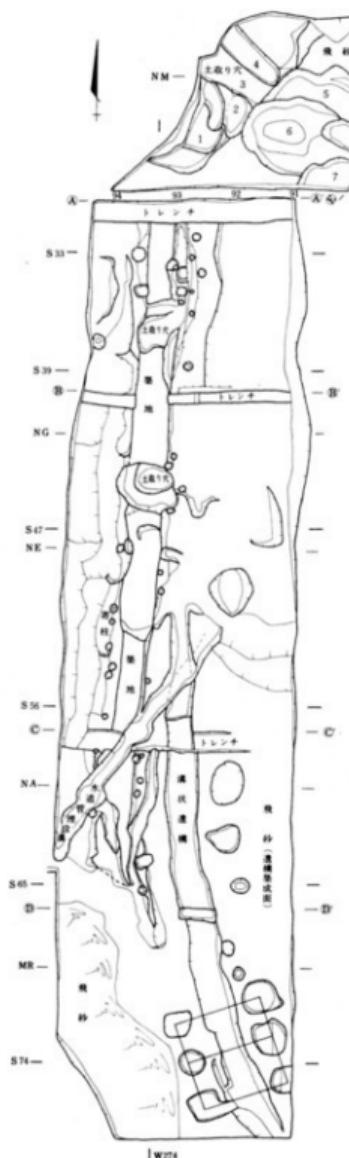
2 発見遺構と出土遺物

築地（第17、18、19図、図版6、7、8、9、10、11）



第16図 第14次調査周辺地形図

第17図 第14次発掘調査発見遺構図



今次調査で検出された築地は、外郭線西辺にあたる。基底巾約2m（約6尺）、現存高約1.4m、全長48mである。

築地は、丘陵頂部から沢筋を南北に横断するような形で走っており各部によって築成方法が多少異なる。

築地築成に際して次のような方法を用いている。まず基盤層である砂地（飛砂層）に、約2mの間隔で深さ約20cm、巾約20cm程の小溝を平行に掘り込み、築地の巾を決定する。しかる後、赤褐色、黒褐色粘土を互層に積みあげ叩きしめる。

またセクションA-A'（第19図）断面図でみられるように、巾2m程の築地本体を築成した後に、内外に各々高さ30~70cm程。築地積土と同質土でもって張り付け本体を補強する作業を施している。断面においてはある程度確認できるが、平面的には崩壊土との識別がかなり困難である。しかし、調査地全域にわたって確認できるわけではなく、果して本体の補強を主とするものか、また大走り的存在にあたるものかは判然としない。寄柱は、調査地中央部で顕著に確認されたが、左右対称位置には認められなかった。従って検出されたすべてのピットが寄柱とは言い難い。ピットはすべて積土、あるいは飛砂層から掘り込まれ、深いピットで60cm程である（第18図、図版7）。

積土は、前述の二種類の異なる色調の土を用いるのが基本的であるが、調査地北端の3m程は、黒褐色粘土を全く用いず、赤褐色粘土のみを用いて築成されている。また、全体において色調の相違から積み手の境界線を明確に把握することができ、特に北側において顕著であった。一段階の積土の

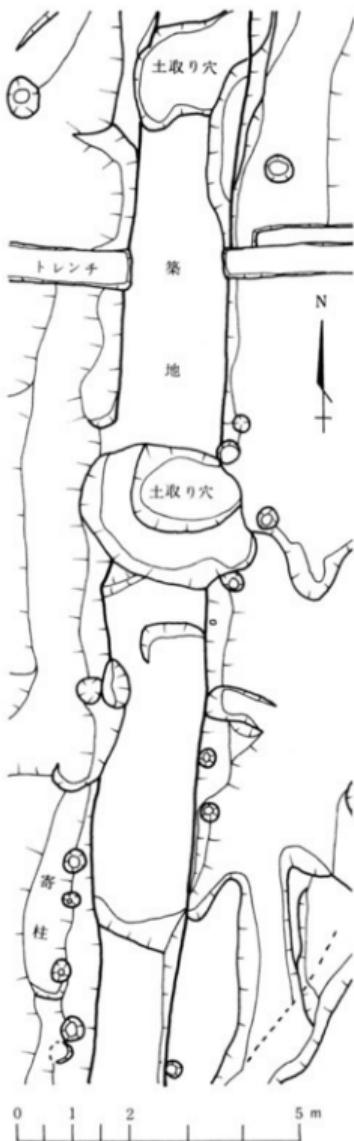
長さは、およそ3m程であるが必ずしも一定ではない。また築地上部と下部では多少積土のズレが生じ、下部から上部まで一気に築成されなかつことを示している（図版10—上）。

沢筋における構築法については、上部構造は他の築成方法と相違はないが、下部構造において違いがみられる。すなわち、沢筋は調査地中央部よりわずかに北寄りになるが、南側の頂部と比較し、高低差が大きいためかなりの急傾斜をなす。そこで互層積土を施す前段階として、基盤砂層上に比較的不純物の混入する赤褐色、黒褐色粘土（築地本体積土より粘性が弱い）あるいは砂質土でもって約1m程整地作業を行ない、その上に他にみられるような赤褐色、黒褐色粘土の互層積土を行なっている（図版10—上）。しかし、沢筋部分は、後世における大規模な土取り作業がなされており基底部をわずかに残すのみである。

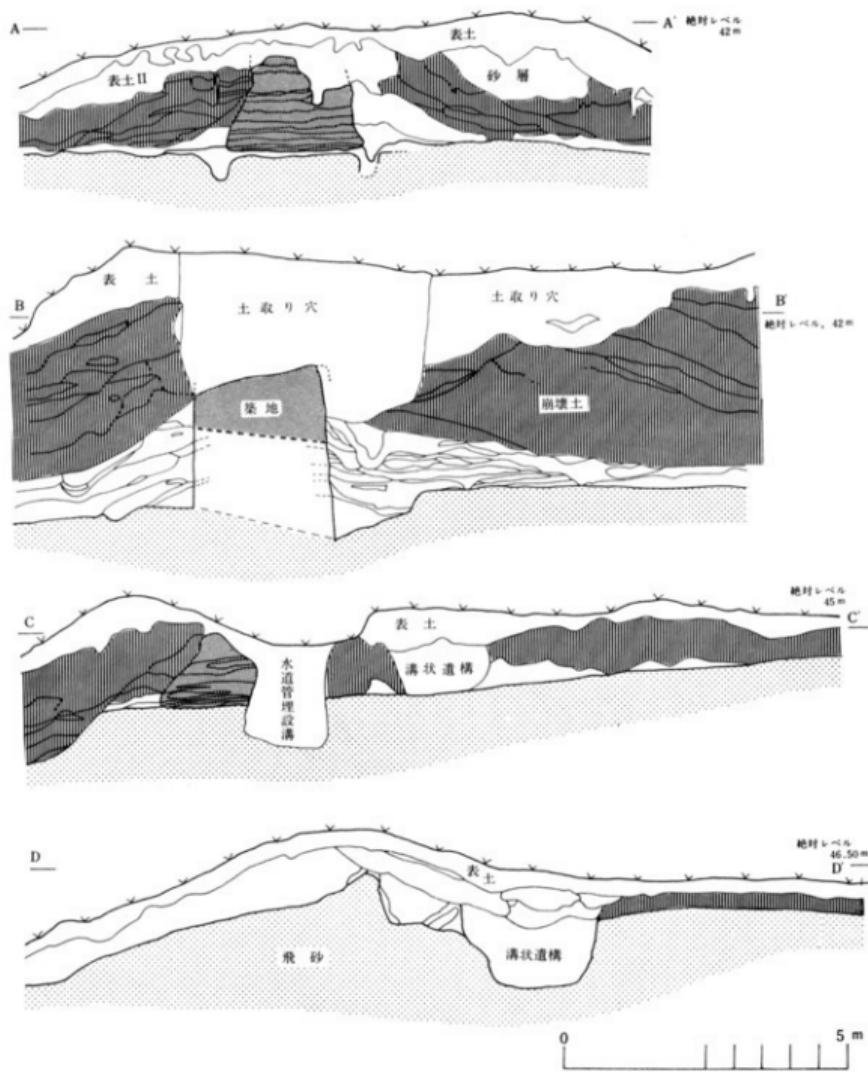
S58mラインより南側は、崩壊と後世の擾乱が激しく、わずかに築地痕跡をとどめているに過ぎない。S63mラインは、外郭線の西辺から南辺に至るコーナー部にあたり、また当所から一段高い平坦部となっていたため、遺構の存在が考えられたが、前述の如く、擾乱を受けており、遺構の確認は不可能であった。しかし南端部においては後述するように、築地崩壊後に築造された。1間×2間の掘立柱建物跡1棟が検出された。

調査地最北部では、多数の新旧土取り穴が確認された。従って、北に走ると考えられる築地は新しい土取り穴によって破壊されていた（第17図）。

調査地全域にわたって瓦混入の崩壊土が確認されたが、その大部分は沢筋に集中し、深い所では3mを測る。崩壊土中には、大別して二層の炭化層が確認された。一層は、崩壊土最上層で「板」、「柱」材と



第18図 築 地 遺 構



第19図 塚地・溝状造構土層断面図

考えられる炭化材が確認された。他の一層は、崩壊土下層のもので2~4cmの厚さで崩壊土と互層をなすが基本的には、同時期の層と考えられた。遺物の出土も沢筋に集中し、炭化層を中心に一部は飛砂層に接する土器も確認できた。

築地崩壊土出土遺物(第20、21図、図版17)

ここで取り扱う遺物は、S41ラインを中心とした沢筋の崩壊土(赤褐色粘土、炭化層)より出土した土器、砥石、鉄製品である。

第20図の5、6、7、第21図の15、17、22は炭層上部、他は、炭層下部から飛砂層の出土土器である。

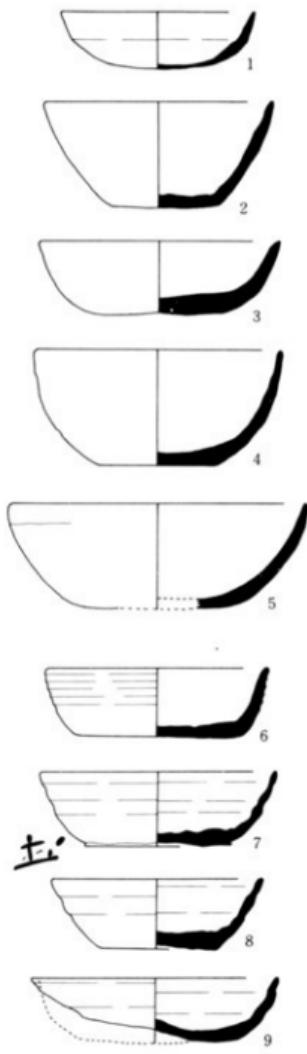
1、2、4、5は、ロクロを使用せずに成形し内面黒色処理を施した土器である。1(図版17-5)は、体部中央にわずかに棱を有する丸底杯で、外面は棱より上方は横ナデ、下方はヘラケズリを施しているが器面の保存が不良で方向、工具巾等については不明である。内面も器面が保存不良で、黒色部分もわずかに残るに過ぎない。2(図版17-6)は、平底を呈する杯で、体部は、底部からわずかに内反し口縁部に至る。外面とも細かいヘラミガキを施す。3(図版17-7)は、器肉が厚く、丸底風を呈する平底杯である。外面口縁部は横ナデ、下方は底部まで、ヘラケズリ痕がみられる。内面は細かいヘラミガキを施す。現在黒色部はみられないが、技術的には本来黒色処理がなされていた可能性が強い。4(図版17-8)は、平底を呈する杯で底部立ちあがり部から体部は大きく内反し口縁部はほぼ真直ぐ立ちあがる。外面ともヘラミガキを施し特に内面はキメ細かい。外面口縁部にも一部黒色処理が及んでいる。5は、丸底風を呈する平底である。外面は、底部まで横方向のヘラケズリ、口縁部はさらに横ナデを施している。1を除き全体的に焼成は良好であるが胎土は小石粒が多く不良である。

6~9は、須恵器杯である。全て回転ヘラ切りで切り離し、軽いナデ痕以外二次調整は施されていない。6、8(図版17-9)は内面全面と外面一部に濃青色を呈する自然釉がみられる。7(図版17-10)は、底部に墨書がみられる。「主」であろうか。9(図版17-12)は、窯内焼成時における激しいユガミがみられる。

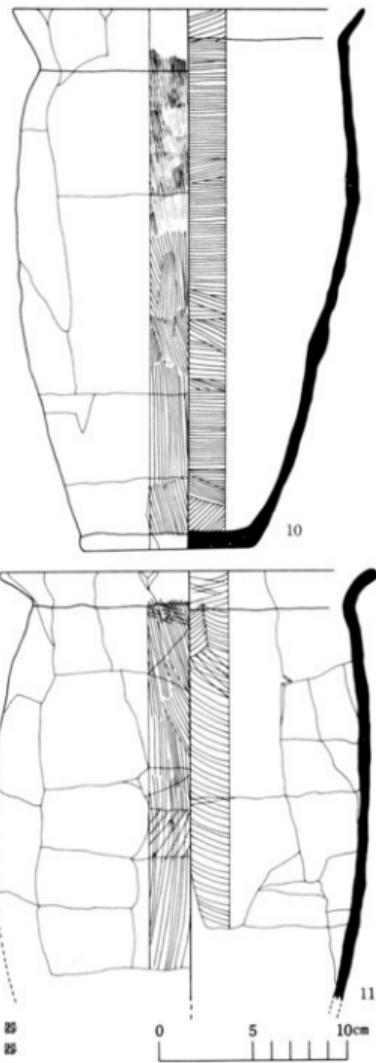
10~14は、土器器表である。10(図版17-13)、11(図版18-1)の頸部は、12、13(図版18-2、3)のゆるやかに外反する頸部と異なり、かなり急に外反し、口縁部に至る。14は、頸部から口縁にかけて3条の沈線が施されている。整形は、荒い、細かいという相違はみられるが、基本的には、外面は、縱方向のカキ目、内面は、横方向のカキ目を施す。内外面口縁部は、ナデによって整形するものと、カキ目痕を残すものとある。

砥石(図版18-4~8)

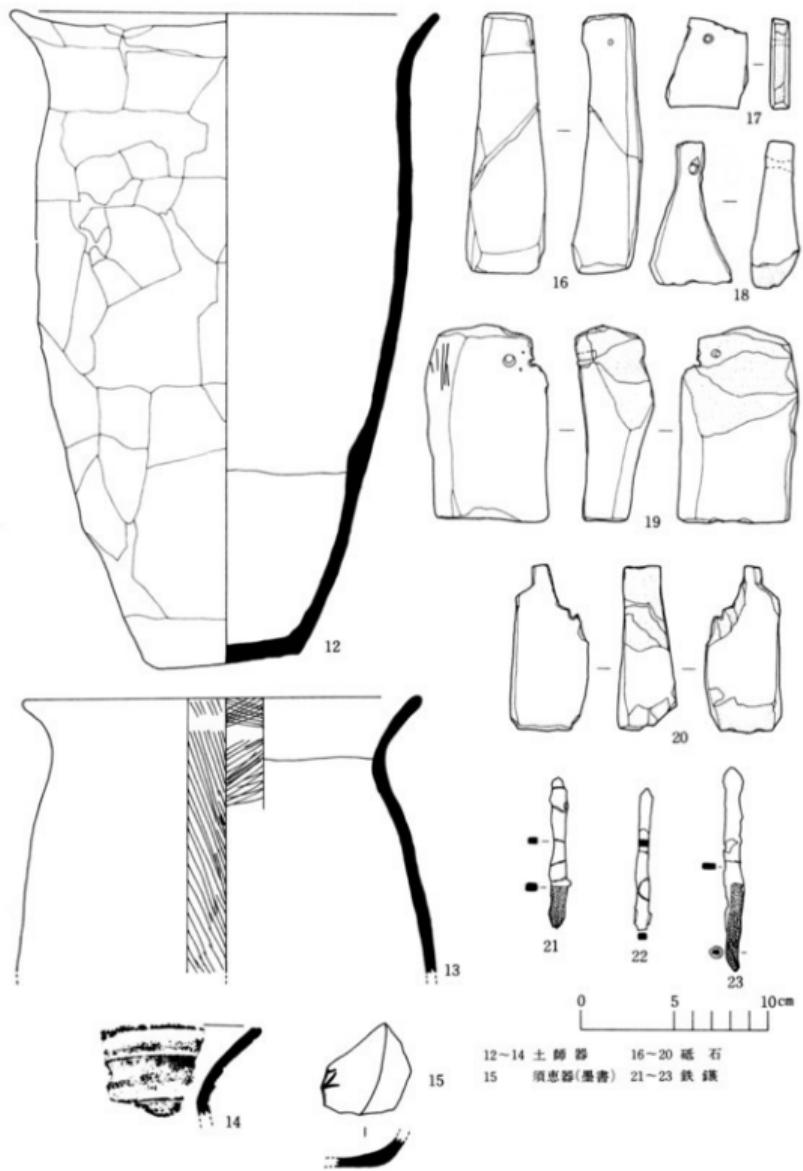
16~19は、小孔を穿った携帯用砥石である。小孔は、両面から円錐形の工具で穿ったもので16は、小孔を穿つべき試みられているが深さ2mm程のところで放棄している。20は小孔がみられない。



1 ~ 5, 10, 11 土器
6 ~ 9 頃器



第20図 染地崩壊出土遺物



第21図 燊地崩壊土出土遺物

鉄鎌 (図版18—9~11)

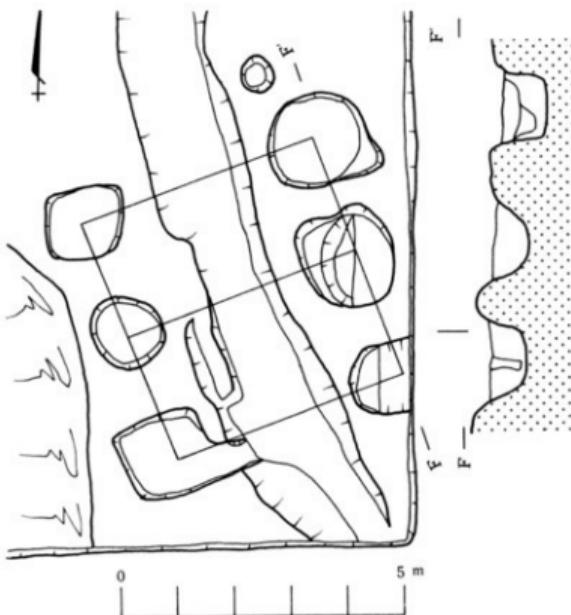
断面形は、角、あるいは偏平を呈し、「身」はわずかに巾広くなる。21、23は「茎」に木部が残存する。

掘立柱建物跡 (第22図、図版12)

調査地南端の築地コーナ部南9mで確認された。南北2間(2.2m+2.2m)×東西1間(4m)で、西南の自然傾斜面の最高部に位置する。周囲は大部分攪乱され削り取られているが、あきらかに、築地および崩壊土より掘り込まれているものである。掘り方は、極めて明瞭であり、径約1.4m、深さ約0.5~0.8mのU字状をなし、いずれも飛砂層まで達している。埋土は、粘性の弱い赤褐色砂質土で、サクサクした感じの土質である。柱の「あたり」抜き取り痕跡は確認できなかった。

掘り方内からは、瓦、須恵器、土師器、須恵系土器の少片が出土している。

この掘立柱建物は、昨年度の第10次調査で検出された。掘立柱建物とほぼ同寸法で、溝状遺構をまたいで構築されていること、出土遺物においても、類似するものである。



第22図 掘立柱建物跡

溝状遺構 (第17、22図、図版12—上)

調査地S51ラインより南側において確認された。築地および築地崩壊土を掘り込み、飛砂層まで達している。巾約2m、深さ約1mのU字溝である。

埋土は、かなり砂質化した赤褐色砂質土の単層で、築地崩壊土とは容易に識別が可能である。飛砂層まで掘り込まれているため溝壁が崩れやすく原形を保つことが困難である。調査時はプランを確認した段階で数カ所にトレッチを入れ堆積状況を把握するにとどめた。

S51ラインより北側においては、後世の最も新しい土取り穴があるためプラン確認は不可能であった。埋土より瓦、須恵器、鉄製品、須恵系土器等が出土した。

溝状造構出土遺物(第23図、図版19-1~3)

溝状造構からは、須恵器、瓦、須恵系土器が少量出土した。そのうち圧化可能な遺物は次の二点である。

1(図版19-1)は、杯というよりは盤に近い器形の須恵器である。回転糸切りで切り離し、全く二次的調整を施さないものである。内面は炭が付着し、一部摩滅痕が認められ、硯に転用されたと考えられるが、全体に焼きヒズミ、さらに底部には2cm程の亀裂が生じているため、果して硯の機能を果したかどうか疑問である。

2(図版19-2)刀子残片である。茎の長さは、約7cm、断面は長方形である。区は棟区と考えられる。銹化が激しい。

土取り穴(第17、24図)

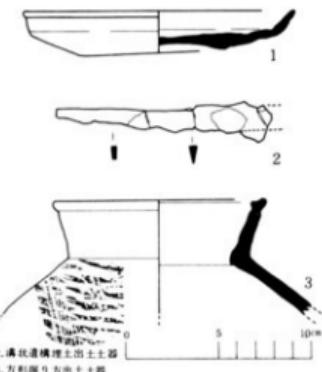
調査地北端では、複雑に入り組んだ多数の土取り穴が検出された。これはすべて地山ローム面まで掘り込まれている。各々掘り方、埋土、出土遺物より新田関係が把握できる。

1~4のグループ(以後Aと仮称)は、表土を除去した段階で掘り方を確認できた。埋土は、よごれの少ない砂(飛砂)が大部分で、間層として、築地積土と同質のものが薄くあるいはブロック状に混入しており

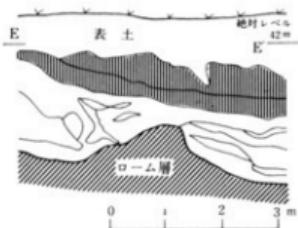
最も新しいものである。遺物はほとんど出土しない。11~15のグループ(以後Bと仮称)は、埋土が赤褐色砂を主体とし、間層に白色砂が入る。また赤褐色砂の上層は黒褐色砂が覆っている。この黒褐色砂は、高清水丘陵上においてしばしばみられ(註1)、調査の結果、須恵系土器を主体とする土層であることが確認されている。また埋土からも須恵系土器がかなり出土している。

5~10のグループ(以後Cと仮称)は、土取り穴群中最も古い造構である。埋土は、黒褐色の炭化物層が主体をなす。その上層あるいは間層として、赤褐色砂質土、粘土ブロックを含む層があり、さらに上層は、瓦を含んだ築地崩壊土で覆れている。

炭化物層は北側の一段高い位置から流れ込んだと考えられる堆積状態を示し、擾乱は受けていな



第23図 溝状造構
方形堀り方出土遺物



第24図 土取り穴土層断面図

い。なお、この炭化物層からは多数の遺物が出土している。土師器が大半を占め、若干の須恵器、鉄滓、カマド壁と考えられる赤褐色に焼成したスサ入り粘土等が出土した。

註1 秋田城跡調査概報 秋田市教育委員会 昭和48年。

土取り穴出土遺物(第25図、図版19)

土取り穴は、前述したことく三つのグループに分けられたが、そのうち、Aグループは全く遺物の出土がなかったので、以下Bグループ、Cグループの順で出土遺物について述べる。

Cグループ出土遺物

土師器杯、甕、蓋、須恵器杯、台付杯、蓋、瓦、砥石、紡錘車、鉄滓等がある。

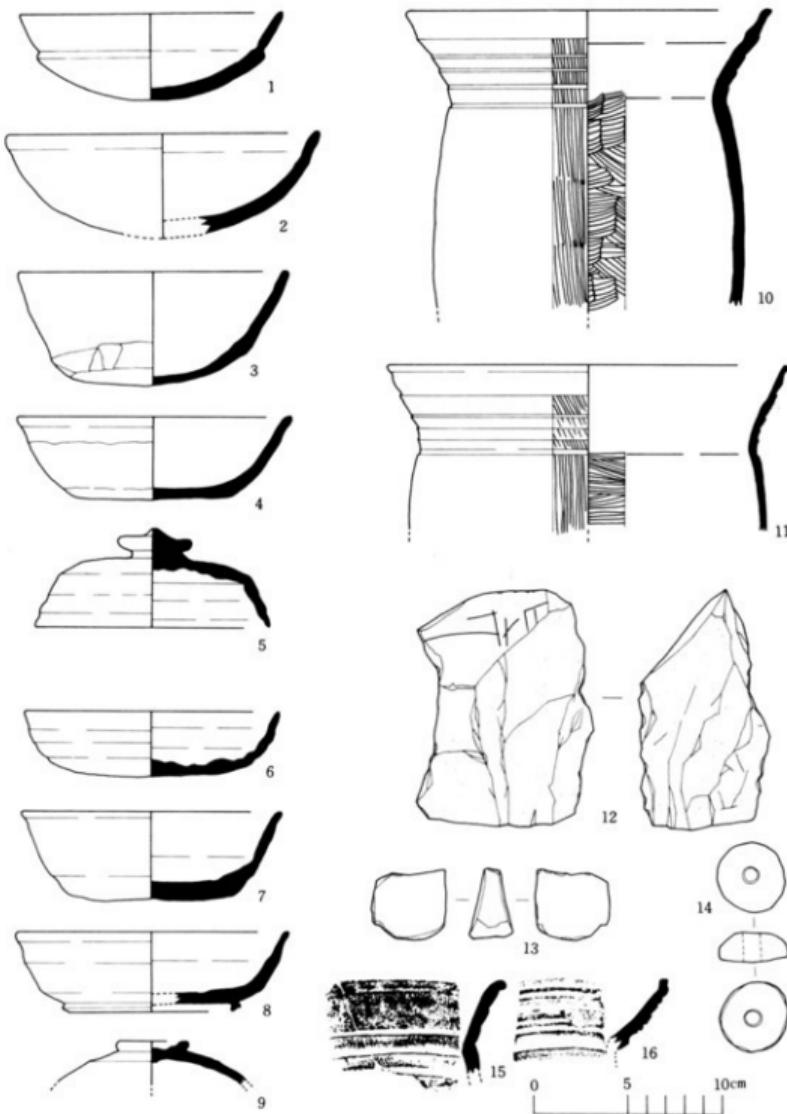
1～4は、すべてロクロ用いずに成形した内黒土師器である。横方向のヘラミガキを主体にするが、4の底部は方形を作るようなヘラミガキを施している。

1(図版19-4)は、内外面体部中央に指ナデによる棱を形成する。すなわち、棱から口縁までは指(布)による横ナデが行なわれ、その際に生じた棱である。棱から底部までは、ヘラケズリの後にヘラミガキを施している。2(図版19-5)は、外面全体に細かいヘラミガキを施している。

3(図版19-6)は、口縁から体部下方までヘラミガキを施すが、上方は特に細かいヘラミガキである。体部下端から底部までは右方向へのヘラケズリを施している。4(図版19-7)は、口縁下1.5cmは横ナデを施し、以下底部まで手持ちヘラケズリを施している。外面には輪積痕と思われる接合部がみられる。5(図版19-8)は、ロクロで成形された土師器蓋である。内外面、ツマミに至るまで全面にキメ細かいヘラミガキを施している。しかし黒色処理を受けたかどうか不明である。

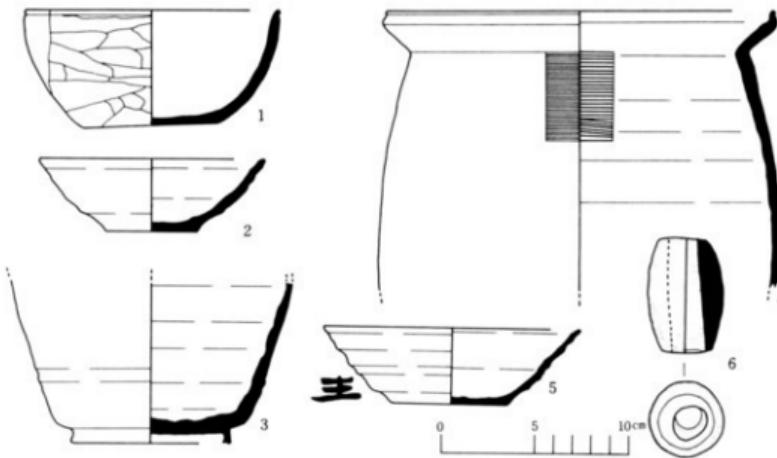
焼成は良好であるが、胎土には小石が多量に混入しザラザラした感じがする土器である。6(図版19-9)は、回転ヘラ切りで切り離し、底部に簡単な指ナデを施している。丸底風の底部から、口縁に至る。立ち上がりは一見古墳時代の土器を思わせる。7(図版19-10)は、胎土の荒い赤褐色を呈する一見土師器と思える土器である。内外面ロクロ痕が明瞭であるが、底部は手持ちの荒いヘラケズリが施され、切り離しは不明である。8(図版19-11)は、台付杯である。回転ヘラ切りで切り離し台部を張り付ける。台部外縁は床面に接しない。9(図版19-12)は、蓋である。環状のツマミを有し、肩部を1.5cm巾で回転ヘラケズリを施している。全体に白っぽく、やわらかい感じのする焼成不良の土器である。10, 11, 15, 16は、土師器甕である。頭部より口縁にかけて特徴的な甕である。すなわち、縱方向のカキ目を施した後、4～6条の沈線を施すものである。中には、カキ目が指ナデ痕によって消されたものもある。胴部外面は、すべて縦方向のカキ目を施す。内面は、巾1.5cm程の工具で横方向のカキ目を施す。11は内面黒色を呈する。口縁部については、大きく二種類に分類できる。10, 11, 15のように頭部から口縁部にかけてほぼ直線的なものと、16のごとく内反するものである。

これらの他固化不可能な小片に、土師器甕の口縁部が48片、このうち16片は口頭部から口縁にか



1~5, 10, 11, 15, 16 土器
6~9 須恵器
12, 13 砥石
14, 織錐車

第25図 NK・NL-89, 90, 土取り穴埋土出土遺物



第26図 N M-85, 86擾乱, 土取穴埋土出土遺物

けて数条の沈線を有するものである。底部は17片出土、うち1片は木葉痕を有する 須恵器杯底部は8片、1片を除いてすべて、回転ヘラケズリを施している。

12, 13は砾石である。13(図版19-14)は、緑色凝灰岩で、携帯用と思われる。12(図版19-13)は、玄武岩質凝灰岩で、12に比し使用面の荒いものである。1面に数条の沈線を呈する使用痕が認められる。14(図版19-15)は、緑色凝灰岩の紡錘車である。全面を、きれいに磨き、特に一面は平坦に磨かれている。中央部の小孔は、両面から穿っている。

瓦は小片が若干出土した。

Bグループ出土遺物

土師器、須恵器、須恵系土器、瓦等がある。1(図版19-16)は、内面黒色処理を施した楕円形土器である。外面は口縁部から底部まで横方向の荒いヘラケズリが施されている。内面体部は、横方向のヘラミカキ、底部は平面が五角形をなすヘラミカキを施している。なお外面部に糸痕が認められる。2(図版19-17)は、回転糸切りで切り離し、二次調整の全く施さない、比較的底部径の小さい須恵系土器がある。この他に、図化不能な13片以上の須恵系土器杯底部片が出土している。3(図版19-18)は、長頸壺の胴部と思われる須恵器である。底部は回転ヘラ切りで切り離している。6は土師器甕である。焼成は非常に良好で赤褐色を呈する。口縁部は、頸部で「く」の字に外反し、口縁部でさらにはほん真直ぐ短かく立ちあがる。口縁部から胴部にかけてロクロで成形されているが、頸部より下方は工具を用いたものである。内面は、手持ちによるカキ目が施されている。

擾乱土出土遺物(第26図、図版19)

5(図版19-19)は、須恵器杯である。底部は回転糸切りで切り離し、二次調整は施さない。体

部に「主」と判読できる墨書がある。6(図版19-20)は、土鍤である。赤褐色を呈し、非常に硬質である。体部の一部に白色の自然釉がみられかなり高温で焼成されていることがわかる。

(小松正夫)

V 第15次発掘調査

1 調査経過

第15次発掘調査は寺内字高野を対象とした。高野地区は史跡の北東部に位置しており、昨年度の第11次発掘調査の対象地区でもある。発掘地点は昨年度の第11次発掘調査A地点のすぐ北側に隣接する空素沼神社所有の平坦な山林地である。調査はこの山林地に昭和38年3月発行の秋田県遺跡地名表に空素沼1号墳として報告されている墳丘状を呈する盛土が確認されており、これがどのような性格をもつものかを追求する目的で10月12日より11月8日までの約1カ月間実施した。調査面積は約633m²(約192坪)である。

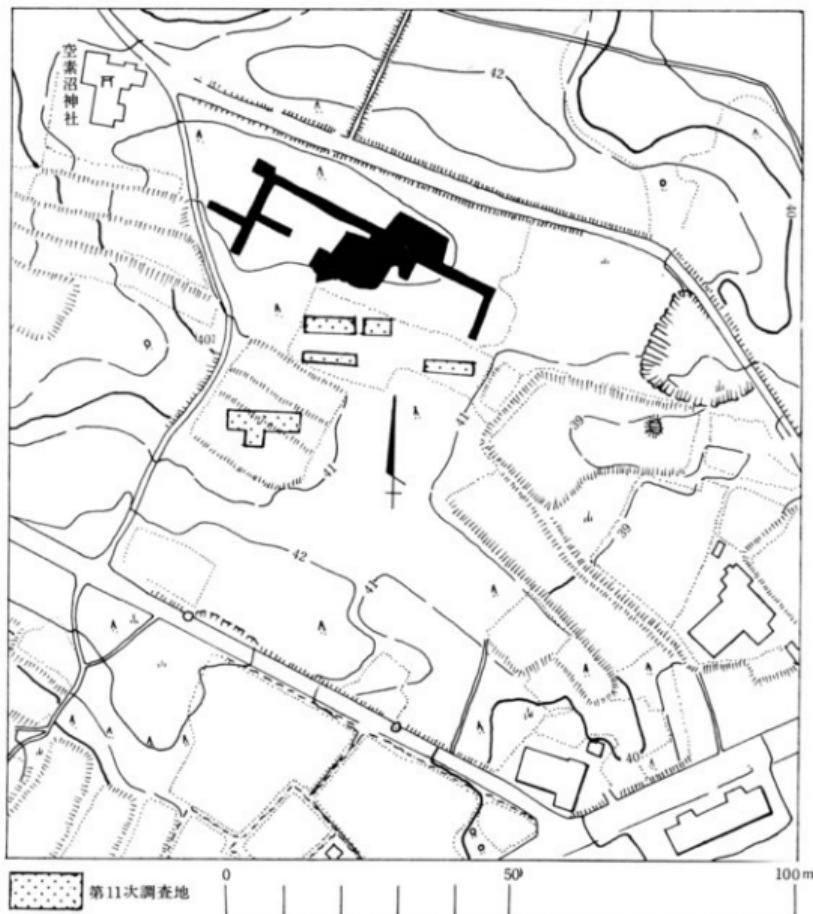
10月12日空素沼1号墳とされている墳丘状を呈する盛土に巾1mのトレンチを中心部に向って任意に設定し予備調査を行なう。結果人工的に盛り土されていることを確認する。14日にはコンタ測量を行ない、その後十字に発掘区を設定し、北東部 $\frac{1}{4}$ を地山まで掘り下げる。その結果明確に人工的に土を積んだものであるか古墳とされる遺構、遺物は検出されなかった。さらにそれぞれ $\frac{3}{4}$ を褐色土まで掘り下げたが同様であった。積土内よりは瓦片、須恵器片が若干出土した。以上のようにこの墳丘状を呈する盛土は古墳ではなかった。10月16日に墳丘上盛土北東部を地山ローム面まで掘り下げた所「L」字状の落ち込みを確認、18日に掘り下げた所埋土内より土師器甕、鉄製品が出土したため、21日に拡張してプランを明確にした。結果、約4×5mの方形を呈する住居跡と判明1号住居跡とする。さらに東南部に同様の落ち込みを確認2号住居跡とする。これらのことにより付近一帯に住居跡、他の遺構の存在する可能性が認められ、トレンチによる遺構確認調査を行なった。当初墳丘状盛土の解明という目的の調査であり全面的に発掘することは行なわなかった。トレンチによる調査で確認された遺構は住居跡と思われる落ち込み3、溝状の落ち込み5である。1号住居跡は、東壁北寄りにカマドをもち、床面も非常に良好であった。埋土内より土師器の内黒丸底杯、小形甕、刀子等が出土した。

10月29日より11月5日まで実測、写真撮影を行ない、8日まで埋め戻しを行なって調査は終了した。

2 発見遺構と出土遺物

墳丘状盛土(第29、30図、図版13中・下)

高さ約2.40m、周囲約36mを測る墳丘状の盛土である。頂部を通るように50cm巾のベルトを残し

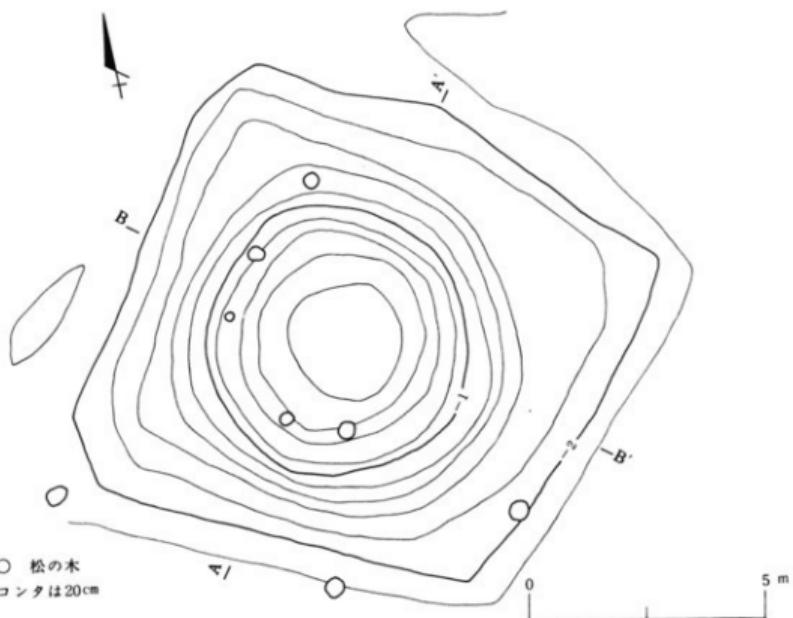


第27図 第15次調査周辺地形図

て十字に発掘区を設定する。最初に北東、南西各 $\frac{1}{4}$ を地山まで掘り下げる。土層は表土の腐植した黒色土が50cm程の厚さで堆積している。II層は30cm程の黒褐色土、III層は80cm程の巾で茶褐色土、褐色土、黄褐色土、黒色土が薄く版築状に堆積している。IV層は暗褐色土、V層は固くしまった褐色土が堆積している。この堆積状態を観察すると明らかに人工的に築造されたものと思われる。しかし、墓壙などの遺構や古墳に関係した遺物は発見されなかった。さらに北、南側それぞれ $\frac{1}{4}$ を褐



第28図 第15次発掘調査発見遺構図

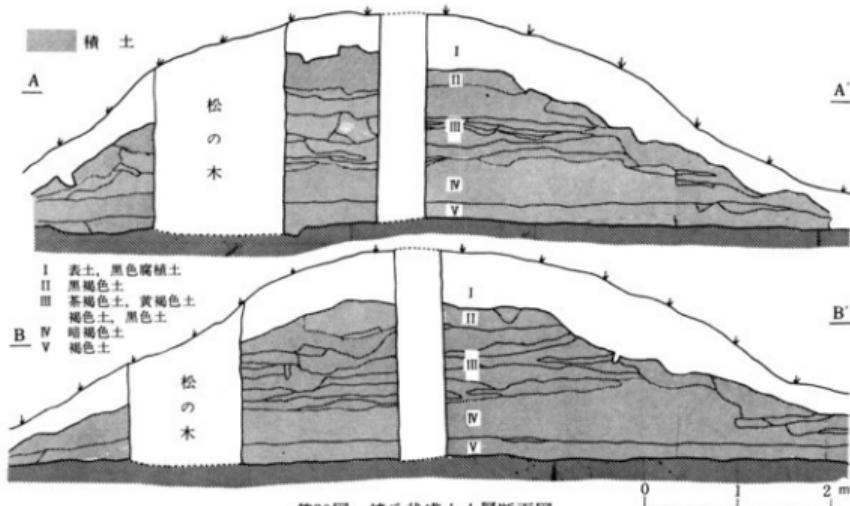


第29図 墳丘状盛土測量図

色土の面まで掘り下がるが遺構の検出はできなかった。積土内より若干の瓦片、須恵器片の出土をみた。以上のようにこの墳状を呈する盛土は明らかに人工的に築造されたものではあるが、古墳ではないことが確認できた。

住居跡

第1号住居跡(第31図、図版14)



第30図 墳丘状盛土土層断面図

調査地北東部ローム面にて確認された。

本住居跡の北側、カマドの両側に松の木、また東南部は2号住居跡に切られており全体を調査することはできなかった。

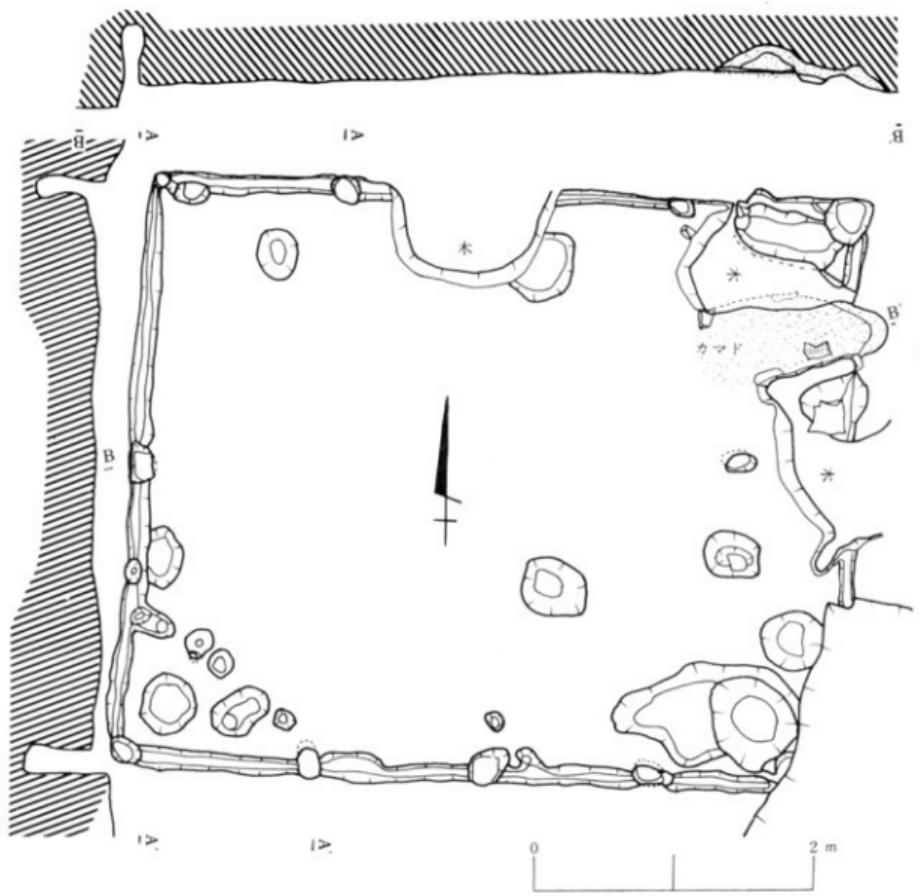
長軸を東西にとり、1辺が東西5.20m、南北が4.39mの隅丸長方形を呈する。床面までの深さは約20cm、平坦で固くしまっている。壁は良好ではほまっすぐに立ちあがり、直下には巾10cm程の周溝が回っている。主柱穴は、短辺に3本、長辺に5本あり、各柱は極めて計画的に配置されている。また深さも32cm~49cmありしっかりしたものである。その他床面上にピットが認められるが性格は不明である。ただ北東壁際にある深さ20cm程のものは中に焼土がつまっており灰捨て穴と思われる。カマドは東壁の北側に設けられている。カマドをはさんで松の木があり外側の部分は調査できなかった。焚口部の巾約50cm、奥行きの長さ約1mを測り、壁の外側に若干突出している。両袖は黄白色粘土で作られ、内壁は赤黒く焼け固くなっている。また、両袖を補強するため平瓦を立てて使用している。焼土はカマド付近に認められ厚さは、カマドを切った所20cm程堆積していた。出土遺物は埋土、床面より土師器杯、甕、鐵製品、瓦が出土した。

出土遺物(第32図、図版20)

埋土内より土師器杯、甕、須恵器杯、甕、鐵製品、瓦が、床面より完形に近い土師器甕、ピット内より土師器杯、甕の破片が出土した。

土師器

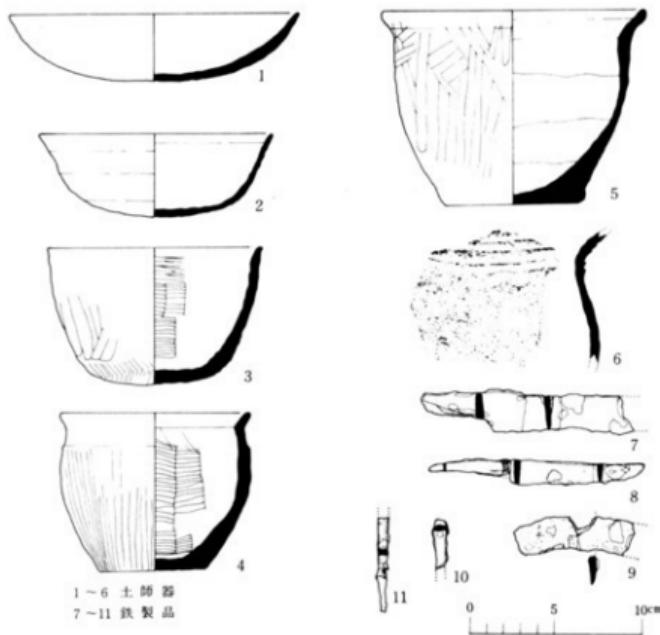
杯：破片ではあるが図上復元すると1（図版20—1）は口径17cm、器高4cmを測る丸底を呈するも



第31図 1号住居跡

のである。内外面ともに黒色処理を施しているが接合できた1片は何かの作用で黒色処理が消滅している。内外面ともにミガキを施している。2(図版20-2)は口径13.7cm、器高4.8cmを測る。器肉は非常に薄く器全体が赤褐色を呈するロクロ使用の土器である。底部には手持ちのヘラケズリを施している。底部は丸底風を呈し、口縁部は若干外反する。

■:3、4、5とともに甕としては小形のものである。3(図版20-3)は口径12.7cm、器高8.1cmを測る。外面体部、底部にヘラケズリを施している。底部はヘラケズリ後にカキ目を施している。内面は横方向にカキ目がみられる。4(図版20-4)は口径11cm、器高9.3cm



第32図 第1号住居跡出土遺物

を測る。平底で胸部が若干ふくらみ、口縁部は「く」の字状に外反する。外面の体部にはタテ方向のカキ目、内面には横方向にカキ目を施している。5（図版20—5）は口径15.5cm、器高11.4cmを測る。平底で底部から胸部にかけてゆるいふくらみをもち頸部から口縁部にかけて「く」の字状にゆるく外反している。器外面には巾7mm程のヘラ状工具と思われるものでカキ目を施している。

内面にはみられない。輪積の痕跡が明瞭にみられる。6は同じく甕の破片である。頸部より口縁部にかけて「く」の字状に外反しており頸部に4条の沈線が回っており棱をつくっている。この類は他にも出土したがいずれも小破片であった。

鉄製品

刀子：2振り出土した。7（図版20—6）は破片であるが残存部長さ12.5cm、身の長さ8.3cmを測る。斜めに切り込んだ刃区である。8（図版20—7）は全長12.7cm、身の長さ7.9cm、茎の長さ4.8cmを測る。直角に切り込んだ刃区である。茎の区に近い所に柄木が付着している。鋒は「フクラ付き」である。両者ともに平棟である。

鐵鎌（図版20—8）：破片1点が出土した。残存部長さ7.1cm、巾1.8cmを測る。刃部はわずかに内反りしており薄く鋭い。腐食が激しい。

鐵鎌：2点出土した。10（図版20—9）は先端部をつぶして偏平にしている。11（図版20—10）は身の部分であり断面は「角形」を呈する。

瓦

埋土、カマド内より平瓦が出土した。またカマド袖部補強のために使用した平瓦もある。

トレンチによる遺構確認調査（第28図、図版13—上）

拡張した部分で1、2号住居跡が確認されたため、この山林地域内に巾1m程のトレンチを6本設定し遺構の確認を行なった。それぞれ第1トレンチから第6トレンチとした。その結果第2、第4トレンチより住居跡と思われる落ち込みを確認、さらに1号住居跡北側の精査により同様の落ち込みを確認、それぞれ第3、4、5号住居跡とした。また第3、4、5、6トレンチより溝状の落ち込みを5本確認した。これらのことにより付近一帯には他にも住居跡、その他の遺構の分布が予想される。

出土遺物（第33図、図版20）

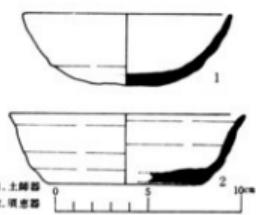
第3、4、5トレンチ内より土師器杯、甕、須恵器杯、甕、瓦の破片が出土した。

土師器

杯：1（図版20—11）は第5トレンチで確認された溝状遺構上面の埋土より出土した。口径11.2cm、器高3.8cmを測る完全形に近い丸底の杯である。胎土には小石粒を多量に含んでいる。器内面に黒色処理を施しておりミカキがみられるが顕著ではない。外面口縁部の一部も黒色処理化されている。体部下方に一段、段を有しその下方に手持ちのヘラケズリを行なって調整している。底部にはカキ目痕がみられる。器全体に摩減が激しい。

須恵器

杯：第3トレンチ表土下部より出土した。破片である。2（図版20—12）は口径12.7cm、器高3.7cmを測る。平底でやや丸味をもって立ちあがり口縁部はわずかに外反する。底部は回転ヘラ切りで調整はみられない。



第33図 第3、5トレンチ内出土遺物

（石郷岡 誠一）

VII 考察

1 秋田城外郭について

昭和48年度概報において、秋田城外郭線は築地でもって構成され、さらに東西、南北約550mの不整多角形であることを述べた。しかし、西辺・南辺の位置については推測の域を脱し得なかつたが、それが今回の第13、14次調査の結果明確となった。

第13次調査は、住宅新築に伴なう事前調査であったが偶然にも東西に走る築地遺構が検出された。

第14次調査は、国営調査においてトレンチ調査を実施し、土壠跡とされた南方延長線を追跡することと、西側に舌状に突出した台地に築地がおよぶか否かを究極の目的として実施された。

調査の結果、西側突出部にはなんら遺構が検出されず、ほぼ南北に直線に延びる築地であることが確認され、さらに調査地南端部では東に曲折するコーナ部が検出された。それによって、北からほぼ直線的に延びた築地は、第14次調査地南端で東に曲折し、第13次調査検出の築地遺構と連続することを確認した。第13次調査検出の築地は、さらに東に直線的に延び昭和48年度の第10次調査の築地と連続すると考えられる。

これらのことより、昨年度概報で推測した秋田城城域が東西、南北約550mであることはほぼ間違いないと考えられる。また外郭線が不整多角形を呈することは、高清水丘陵という地形的条件に左右されるところが大きいと考えられる。

以上のように、第10、13、14次調査の結果、秋田城における外郭線の基本構造は築地であることが明確となつたが、さらに他の一時期を考えることができる。すなわち、各調査で検出されているように、築地崩壊後の高まりを利用して築成された堀立柱建物と溝状遺構の時期である。

堀立柱建物と溝状遺構は、その埋土出土遺物からみてほぼ同時期と考えられ、あきらかに築地とは異なる時期の遺構である。

これらの遺構は、東、西、南辺外郭線では明確であるが、北辺外郭線においてはまだ十分な調査が実施されておらず不明な点が多い。

2 住居跡について

今年度調査では、第12、13、15次調査で計4軒の住居跡が検出された。

各住居跡の形態、出土遺物については各項で詳細を述べたが、各々の時期は次の如く考えられる。しかし、第12次、第13次2号住居跡は、出土遺物が少ないので明確さを欠く。

第13次調査の1号住居跡は、床面、埋土より静止系切りで切り離した後、底部に手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリを施した須恵器杯が各一点、また土師器は、埋土より内面黒色処理を施した体部破片が出土した。

これらの出土遺物から、1号住居跡は8世紀後半を中心とした時期が考えられる。2号住居跡は、床面からの遺物は発見されなかつたが、1号住居跡との層位関係からみて若干新しいと考えられる。

第15次調査の1号住居跡は、かなり多くの遺物が出土した。土師器は、内面黒色処理を施した丸底杯と、ロクロで成形した後、底部を手持ちヘラケズリによって荒く仕上げた丸底風杯、他に完形に近い小形甕が3個体いずれも床面より出土した。須恵器は、回転ヘラ切りの杯がカマド内から、また土器の他に鉄鎌2、刀子1、小刀1、鎌1が埋土より出土した。出土遺物のうち、土師器杯、「く」の字状口縁部を有する小形甕など土師器においてみると、8世紀後半から9世紀初頭に位置づけられるであろう。なお、第15次調査では、プランの確認だけにとどめた他の4軒の住居跡についても、各トレンチ内出土遺物からすれば、ほぼ同時期であろうと考えられる。

昨年度調査概報では、住居跡内出土遺物の種類が城内、城外で相違がみられることを述べた。すなわち、城内からは砥石および鉄製品が多く出土し、城外検出の住居跡では極めて少ないことを根拠としたものであった。

ところが、第15次調査では、1号住居跡より上述した鉄製品等が出土し、城内検出の住居跡出土遺物と極めて類似している。

時期的には、第9次調査出土の遺物より古い様相を示すが、遺物のセット関係からすれば城内の遺物の出土地は、城外東側にも存在することになる。

これら第9次調査と第10、15次調査の遺物セット関係にみられる相違は、住居跡群の性格、あるいは時期的な相違によるものかこれからの調査地の拡充によって明確にされなければならない。

3 土取り穴の年代と性格について

昭和47年度の第5次調査から今年度の第15次調査まで、二調査地において多数の土取り穴が検出された。

初年度の高野地区の第6次調査では、ローム層を掘り込んだ多数の不整形ピット群が検出され、あるピットより近世の焼物が出土したため極めて新しいピットであることが判明した。また地元民の話によると高野地区は、良質の壁土（ローム土）が採土できるため最近まで土取りが行なわれたらしい。まさに第6次調査の不整形ピット群は、この土取り穴にあたるものと思われる。

さらに今年度の第14次調査においても多数の土取り穴が検出された。しかしこの土取り穴群は前項（32頁）で述べたように、層位、出土遺物からみて3類に大別できた。

Aグループは、高野地区の第6次調査で検出された土取り穴群と同類と考えられるが、B、Cグループについては、埋土あるいは上層出土の遺物などからみて極めて重要な意味を有することが考えられる。

Bグループは、埋土の上層を黒褐色砂層が覆っている。黒褐色砂層は第7次調査でも確認された

が、かなり厚い層をなし須恵系土器を主体とする遺物包含層である。埋土からも土師器、須恵器と混じって須恵系土器が出土している。従ってBグループ土取り穴は、須恵系土器が使用され始めた頃か、それ以前と考えられる。

Cグループは、埋土が粘土ブロック、薄い砂層で、上層は炭化物層で覆われている。埋土からの出土遺物は少ないが、炭化物層からは多量の土器が出土している。その大部分は土師器で、杯類はすべてロクロ未使用、内面黒色処理を施している。甕は、出土の大半が頭部から口縁部にかけて数条の沈線を有する特徴的な土器である。須恵器は、小片が大部分であったが杯の底部はすべて回転ヘラケズリ調整を施している。

土師器杯をもう少し詳細にみると平底、丸底の両者がある。丸底の土器は、外面部中央に稜を有するものと、口縁部までゆるい曲線で至るものとある。内面はキメ細かいヘラミガキ、黒色処理を施す。外面はヘラケズリ、あるいはヘラケズリの後にヘラミガキを施している。

このようにCグループの出土遺物は、他のA、Bグループとは量、質的に異なり、また土器そのものも古い形態を示す。形態的には、東北南部でいう栗開式から国分寺下層式頃と考えられる土器群で、8世紀中頃から9世紀初頭に位置するであろう。すなわちCグループ土取り穴は、9世紀初頭かあるいはそれ以前の遺構と考えられる。

それではB、Cグループ土取り穴は、遺構あるいは時期的に何を意味するものであろうか。

遺構的には、今さら述べるまでもないが、他の遺構（土壙、柱穴、竪穴）と考えられる確証はなく、乱雑に掘られた土取り穴と解釈すべきであろう。

これら土取り穴は、すべてローム層まで掘り込まれており、赤褐色のローム土の必要性から生まれた遺構と考えられる。

これまでの調査結果より、ローム土を必要とする遺構には第一に築地塗成土、あるいは第5次調査周辺の土壙が考えられる。

Cグループは、土取り穴の上層が炭化層、さらに築地崩壊土が覆っている。すなわち築地崩壊以前の土取り穴である。炭化層出土遺物の年代から考察すれば、9世紀初頭以前には既に土取り作業が行なわれていたことになる。9世紀初頭以前にこのように大々的に土取りを必要とする事業として最も可能性の強いものとして前述した築地塗成事業が考えられる。ということは、築地塗成が少なくとも9世紀初頭かそれ以前に行なわれていたことになる。

Bグループは、須恵系土器を主体とする黒褐色砂層に覆われており、11世紀以前の遺構であることは前述した。それならば11世紀以前において、土取り作業の必要性を伴なう遺構、史実は何が考えられるか。

遺構では第一に築地補強、あるいは土壙塗成が考えられる。土壙は、現在のところ勅使館地区においてのみ確認されているが、塗成土中に須恵系土器が混入しており、Bグループ土取り穴とは時期的に矛盾する。また史実としては、天長7年(830)の大地震、元慶2年の夷俘の反乱が考えられ

るが、天長7年は9世紀前半であり、土取り穴の須恵系土器出土を考えると年代的に矛盾する。元慶の乱においては、藤原保則によってその復興がなされ、しかも「皆倍旧制」とあるように大がかりな復旧作業が行なわれたと考えられ、むしろ9世紀後半に起こった元慶の乱の可能性が強い。

上述の考察は、土取り穴の配列状態からもある程度伺うことができる。すなわちCグループとした最も古い土取り穴は、築地本体に接するような状態で検出されたのに対し、Bグループは、Cグループよりさらに外側に位置する。

しかしこれらの考察は、第14次調査においてのみ言えることで、同じ築地遺構を検出した第10次、13次調査では土取り穴が検出されていないことに今後の問題が残されるであろう。（小松正夫）



図版 1

秋 田 城 全 景



第12次発掘調査全景
(南から北)



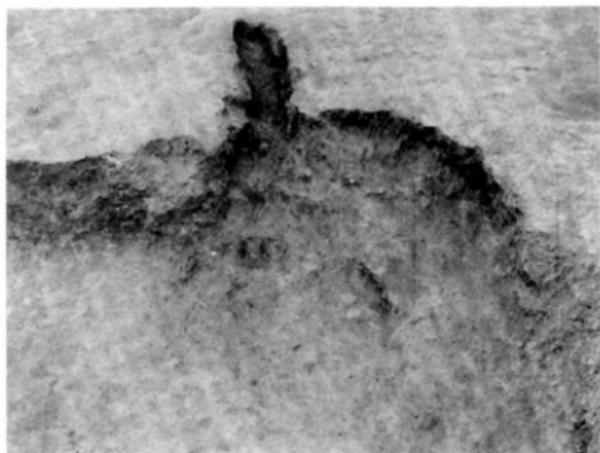
溝状遺構
(東から西)

図版3

住 跡 (西から東)

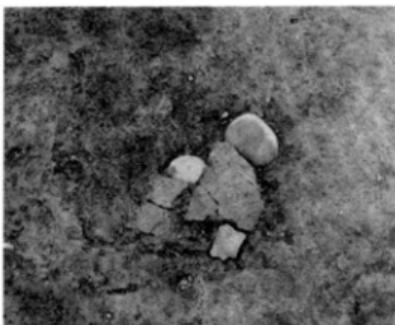


住 跡 (南から北)



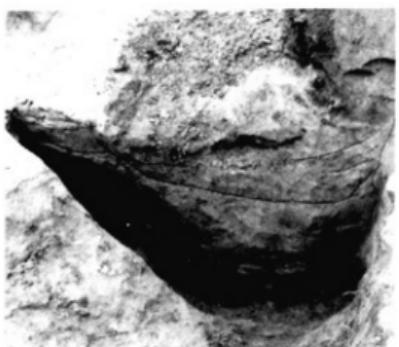
下右 繩文土器出土状況

下左 壺出土状況





図版4 上 第13次発掘調査全景・1号住居跡(西から東) 下 2号住居跡(西から東)



図版5 上 築地断面 下左 築地(北から南) 下右 掘立柱断面



上 第14次発掘調査
航空写真(南から北)



下 染地全景(北から南)



下右 築地・寄柱
（北から南）
下左 築地（北から南）





上 築地(南から北)



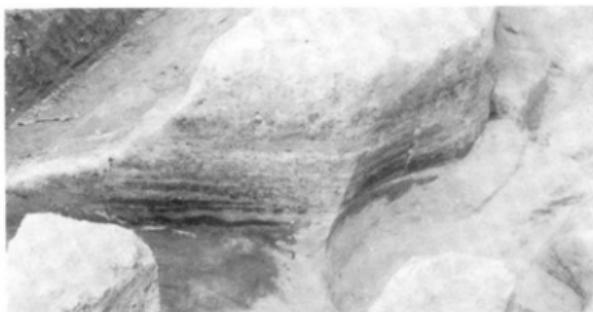
下 方形掘り方



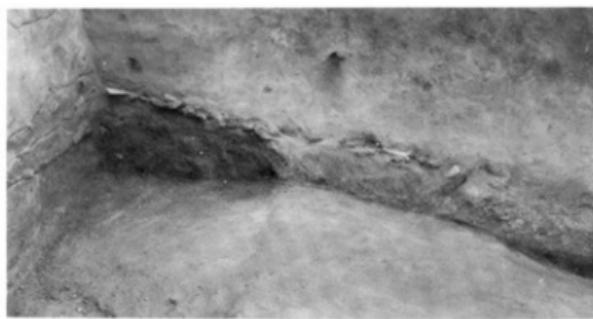
図版9 上 染地、崩壊瓦、炭化材出土状況(南から北) 下 炭化材



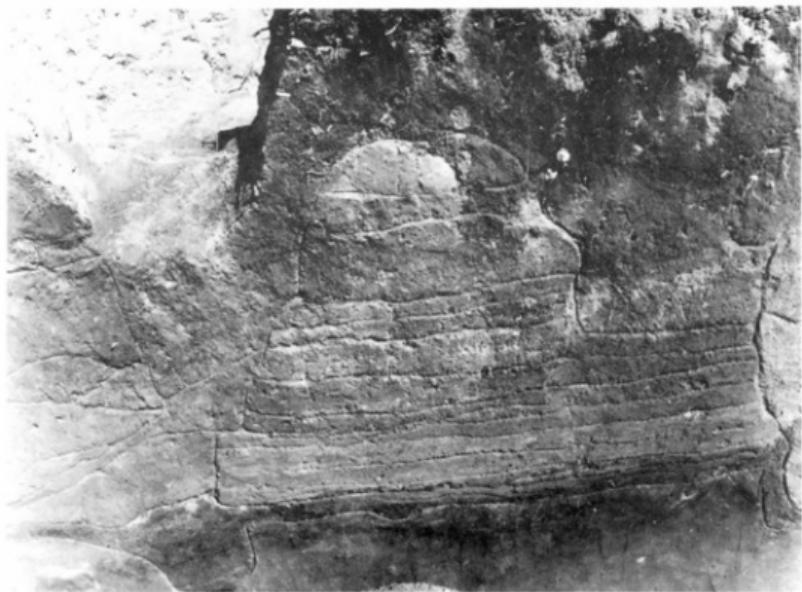
上 } 染地積土狀況
中 }



下 崩壞瓦斷面



圖版10



图版11 上、下 荚地土层断面



図版12 上 挖立柱建物(北から南) 下 挖立柱建物掘り方

第15次発掘調査全景
(東から西)



填丘状盛土
(北から南)



填丘状盛土断面
(東から西)

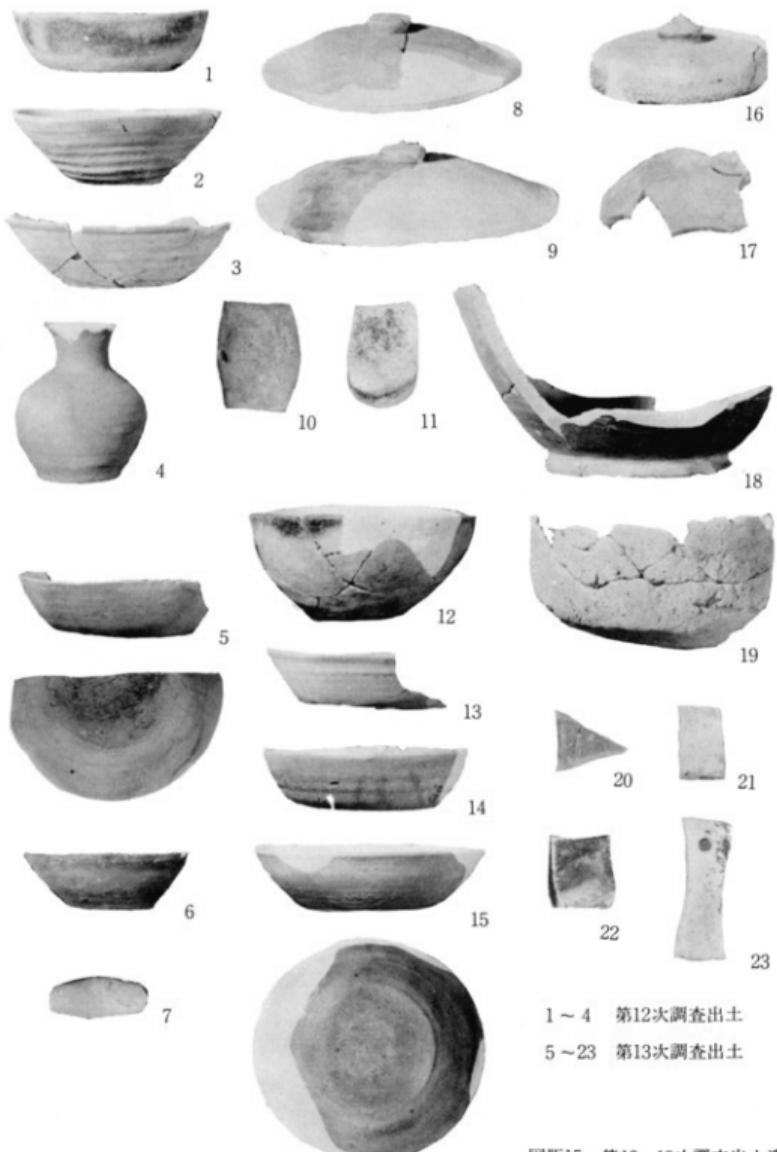




上 第1号住居跡(西から東)

下左 第1号住居跡カマド

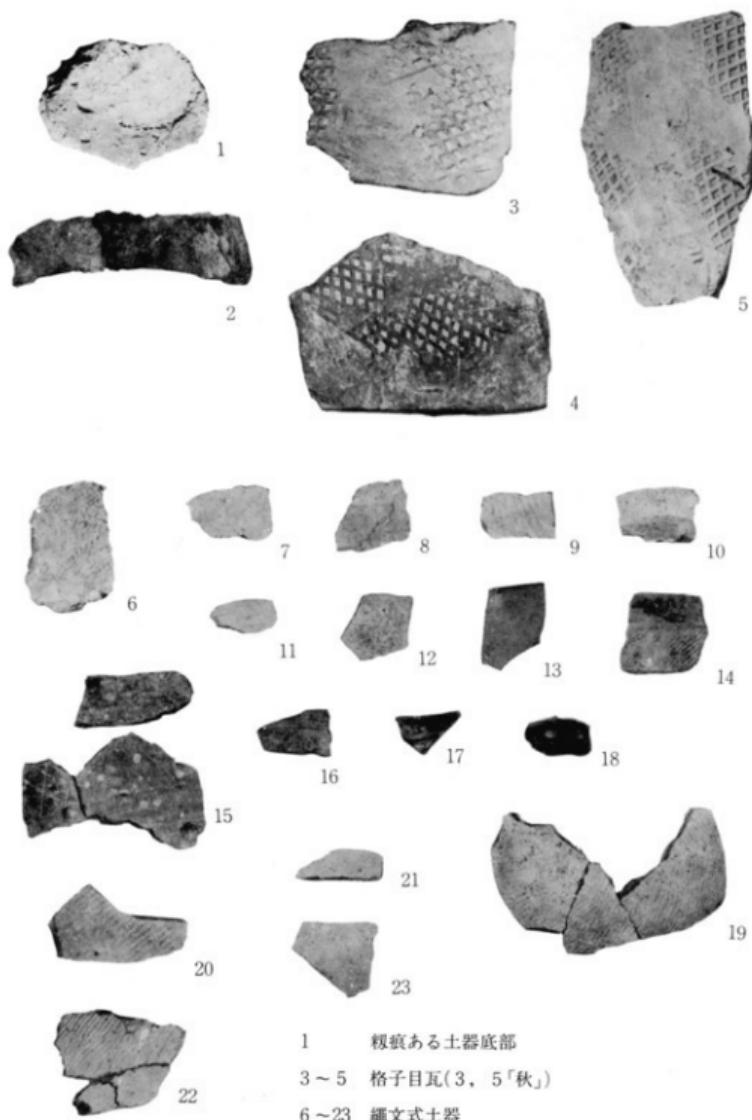
下右 第1号住居跡土器出土状況



1 ~ 4 第12次調査出土

5 ~ 23 第13次調査出土

図版15 第12, 13次調査出土遺物



図版16 第13次調査出土遺物



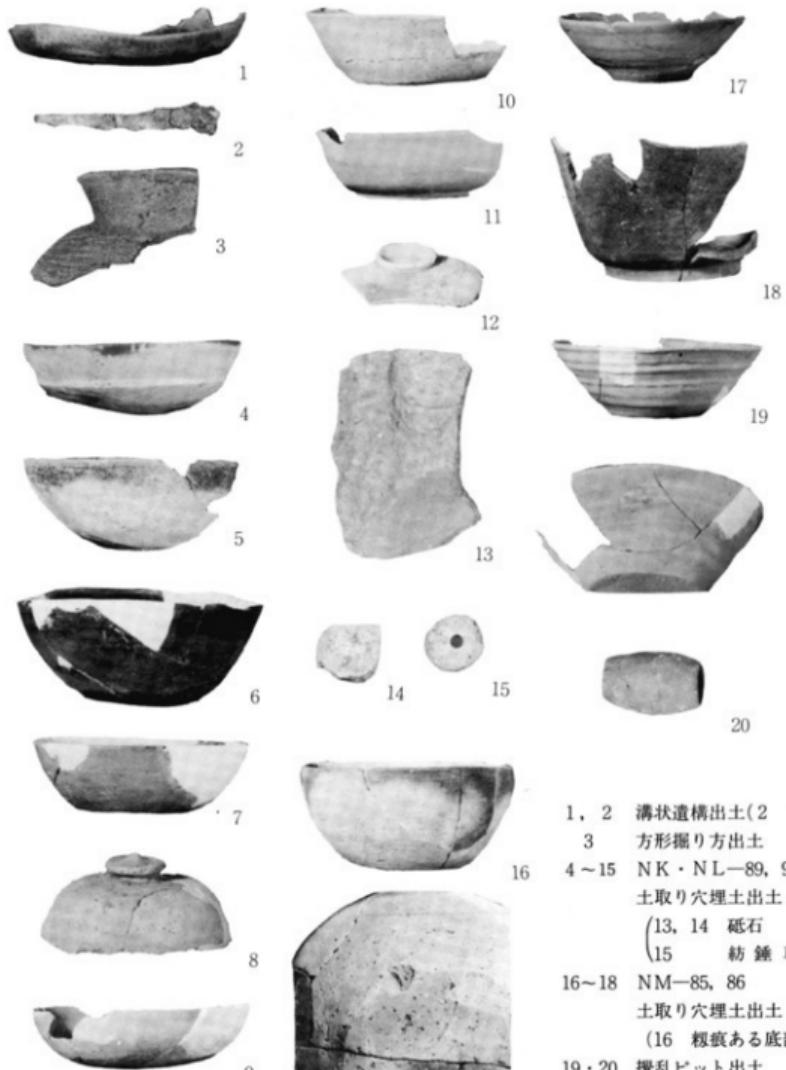
1 ~ 4 第13次調査出土(縄文式土器・石匙)

5 ~ 13 第14次調査出土(築地崩壊土)

10 墨書土器「主」

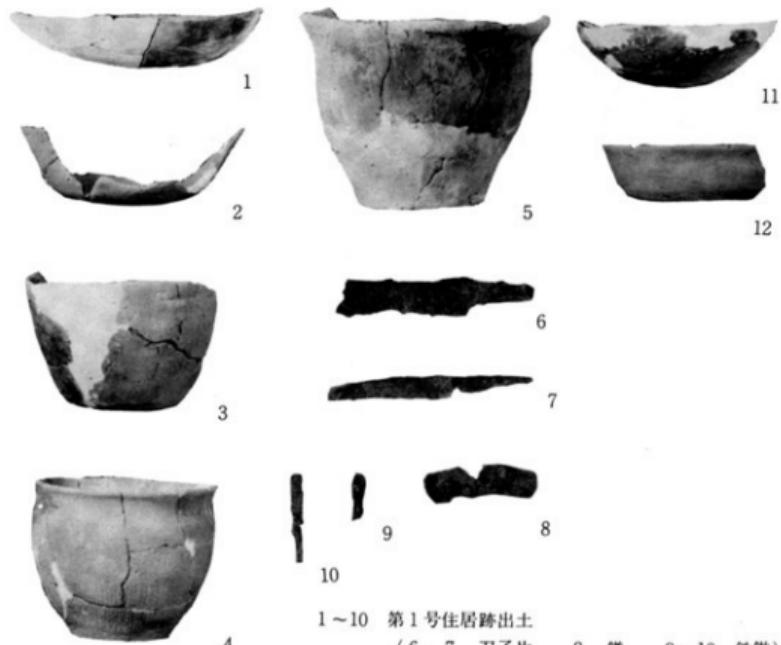


1~11 築地崩壊土出土
(4~7 研石 9~11 鐵鎌)



図版19 第14次調査出土遺物

- 1, 2 溝状遺構出土(2 刀子片)
- 3 方形掘り方出土
- 4 ~ 15 NK・NL-89, 90
土取り穴埋土出土
(13, 14 砧石)
(15 紡錘車)
- 16~18 NM-85, 86
土取り穴埋土出土
(16 横痕ある底部)
- 19, 20 攪乱ピット出土
(19 墨書「主」)
(20 紡錘車)



1~10 第1号住居跡出土
 (6, 7 刀子片 8 錐 9, 10 鉄錐)
 11 第5トレンチ出土
 12 第3トレンチ出土

図版20 第15次調査出土遺物

